

Title	相互行為研究(7) : 談話と危機 (クライシス) (冊子)
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2020
Issue Date	2021-05-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85205
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

言語文化共同研究プロジェクト2020

相互行為研究⑦

— 談話と危機（クライシス） —

秦		かおり
岡	本	能里子
児	島	麦穂
中	川	佳保
張		碩
竹	村	博恵

大阪大学大学院言語文化研究科

2021

言語文化共同研究プロジェクト2020

相互行為研究⑦

— 談話と危機（クライシス） —

秦		かおり
岡	本	能里子
児	島	麦穂
中	川	佳保
張		碩
竹	村	博恵

大阪大学大学院言語文化研究科

2021

目 次

秦 かおり	在日外国人移民のナラティブ分析 —高度外国人材としてのアイデンティティに着目して—	1
岡本 能里子	多言語多文化共生社会に向けた外国人入れ政策の課題 —ウィズコロナ時代に向けたサイン表示から考える—	11
児島 麦穂	20代の女性多人数会話における「アベノマスク」に関する 笑いの共有	21
中川 佳保	新型コロナウイルス流行下における傷つきの社会文化的意味 の予備的考察 —Twitterにおける「傷つく」の使用から—	31
張 碩	新型コロナウイルス感染症に関する記者会見に見られる厚生 労働省の姿勢 —コーパスに基づく批判的談話研究の試み—	41
竹村 博恵	日韓問題と共存する女性たちのアイデンティティ —韓国での不買運動に関する語りの分析を通して—	51

児島麦穂

1. はじめに

本研究は、オンラインで行われた20代半ばの女性多人数会話において、COVID-19について語られる場面データをとし、その相互行為の談話分析を行う。本稿で扱うのは、筆者が2018年に開始した継続・縦断調査の一環として2020年4月に収録したデータである。例年、対面での会話を対象に調査を行っているが、2020年度はCOVID-19の影響によりオンライン通話の収録を行った。本稿ではその中で、2020年4月1日に安倍元総理大臣が発表した布マスクを各家庭に2枚配布するという政策について参加者らが笑いを共有する場面に注目し、分析を行う。

日本国内では、2020年1月に武漢から帰国した男性から日本で初のCOVID-19の陽性反応が検出された後、次々と感染が拡大し、安倍元総理が布マスク配布についての発表を行った4月1日には268人¹の感染者が確認されている。その後、4月7日には埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、大阪府、兵庫県、及び福岡県の7都府県を対象区域とする緊急事態宣言が発令²され、続いて4月17日には全都道府県を対象に緊急事態宣言が発令³された。データ収録を行った4月30日は、正にこの緊急事態宣言が発令されている最中であり、日本在住で会社員の参加者らは自宅でのリモートワークを余儀なくされるなど、この宣言に大きく影響を受けたと言える。

布マスクの配布に関して、安倍元総理は4月1日の発表で「この布マスクは使い捨てではなく、洗剤を使って洗うことで再利用可能であることから、急激に拡大しているマスク需要に対応する上で極めて有効であると考えております。(中略)全国で5,000余りの世帯全てを対象に、日本郵政の全住所配布のシステムを活用し、一住所あたり2枚ずつ配布することといたします。」

(首相官邸⁴)と述べている。この発表を受けて各メディアは、「まさかエープリルフル?」。(中略)インターネット上では疑問や戸惑いが広がった。どうして布マスクに決まったのか、なぜ2枚なのか、果たして効果は?」(毎日新聞⁵)、「安倍首相の経済政策「アベノミクス」をもじって「アベノマスク」と取り沙汰され、(中略)《時間もお金も労力も無駄》など反発する声も多い。」

(産経WEST⁶)と報じている。このようにCOVID-19の感染が拡大していた状況において、各家庭に2枚の布マスクを配布するという政策は、布マスクの質や感染症に対しての有効性、各家庭の人数に関わらず一律で2枚配布であったこと、タイミングの遅さなどが批判や風刺の対象となった。また、日本国内の感染者が比較的少なかったとはいえ、諸外国がロックダウンや外出制限を実施していたタイミングで、そのような制限を実施せず、1日に発表されたのはマスク2枚のみを配布するという政策内容であったことも批判の背景に挙げられる。

¹ <https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/data-all/> (NHK 最終閲覧日 2021/3/28)

² https://www.kantei.go.jp/jp/98_abe/actions/202004/07corona.html (首相官邸 最終閲覧日 2021/4/18)

³ https://www.kantei.go.jp/jp/98_abe/statement/2020/0417kaiken.html (首相官邸 最終閲覧日 2021/4/18)

⁴ https://www.kantei.go.jp/jp/98_abe/actions/202004/1corona.html (首相官邸 最終閲覧日 2021/3/28)

⁵ <https://mainichi.jp/articles/20200402/k00/00m/040/196000c> (毎日新聞 最終閲覧日 2021/3/28)

⁶ <https://www.sankei.com/west/news/200413/wst2004130020-n1.html> (産経WEST 最終閲覧日 2021/3/28)

本稿では、このような批判の対象となった政策及び布マスクに関して会話参加者らが笑いを共有するプロセスを分析することにより、そこに観察される COVID-19 およびこの政策に関しての語られ方を明らかにすることが目的である。日本での日常会話では、政治的な意見が違った場合、その違いにより人間関係に摩擦を生みかねないといった理由で、政治的な話題が避けられる傾向にあると言われている(岡本, 2004)。そのため、このような傾向にある日本語会話である本データにおいて、参加者らがなぜ、どのように日常的な友人同士との間で政治的な話題を笑いの対象にしたのか明らかにしたい。

2. 先行研究

2.1 笑いの共有

笑いの共有に関して Jefferson (1979)は、話し手による invitation と聞き手による acceptance が成功した際に発生するとしており、聞き手による笑いは話し手が表出する遊びのフレームを承認する機能を持つことを明らかにしている。また、Glenn (2003)はこの様な笑いの共有が、参加者間で空想上のストーリー(dramatized talk)を協働構築する場面で多く発生し、笑いの内容が特に面白かった場合に、複数の参加者らが笑いを発展させ、笑いを長引かせることを明らかにしている。このような笑いの共有は参加者らが共通の認識を持っていることを示す(早川, 2000) 他、同時多発的な笑いは女性同士による会話で多く発生し、このような笑いが参加者間の協調性を表出している(難波, 2018)と言われている。

本研究では、参加者らが政府から配布された布マスクに関して空想上のストーリーを協働構築し、笑いを共有する様子が観察されている。このプロセスを分析することにより、笑いが本場面において相互行為上でどのように機能しているのかを解明する。

2.2 政治的な内容の笑いについて

Hmielowski et al. (2011)は人が政治的なユーモアを好む理由として、(a) 情報の不一致を理解するため、(b) 優位性を増幅させるため、(c) 不安やストレスから逃れるため、(d) 社会的なつながりを持つためとしている。また Lee and Jang (2017)は政治風刺に関して、情報が正確に扱われるわけではないため教育的な効果があるとは言えないものの、政治的な出来事に関して思考するプロセスを助長する効果があるとしている。またメディアが報じる政治風刺が、対面コミュニケーションにおける政治的な話題を促進することも明らかにしている。さらに、COVID-19 に関しての風刺的な笑いを扱った研究として Dynel (2021)が挙げられる。この研究では COVID-19 に関しての Internet memes をデータとし、マスク不足のため仕方がなくマスク以外の日用品で口を覆っている者の写真や、その様な場面のパロディーを行なっている者の写真がユーモアの対象としてオンライン上で拡散されているケースを分析している。このように世界規模のパンデミックが発生している COVID-19 や、感染症対策のための物質不足の状態が風刺的な笑いの対象となる様子も観察されている。

欧米では政治風刺がトークショーやスタンダップコメディなどの公の場で日常的に行われているのに対し、日本ではあまり行われていないと言え、日本でのメディアや日常会話において政治

的な内容の笑いを分析する先行研究も管見の限り多くはない。本研究では、COVID-19 への対策として発表された布マスク 2 枚を配布するという政策が参与者間で自然と話題に上がり、それが笑いの対象となる場面が、20 代女性らの会話において観察された。分析では、参与者らがどのように政治風刺を含む笑いを共有するのかを明らかにする。また、日本での会話であり行われることのない政治的な内容の笑いがなぜ本データでは観察されたのか、このような笑いを共有するにあたり何に影響を受けたと推察できるかを分析していく。

3. 研究方法

3.1 分析枠組み

本研究は相互行為を分析する概念として、会話は人が相互的に行う社会的な行為であり、参与者全員によって実行される共同行為(joint action)であるとする Davies & Harré (1990)を援用する。Davies & Harré は、人は非言語コミュニケーションを含むことばを介して何らかの行為を実行している(speech-act)という視点から相互行為を分析すべきであるとした。つまり、会話上で行われる行為は発言者のみによって実行されるのではなく、複数の参与者らにより相互的に遂行される。

また、本研究では参与者間の相互理解において必要な背景知識である共通基盤 (common ground)(Clark, 1996)の概念を用いて分析を行う。Kecskés and Zhang (2009)はこの共通基盤には、個人が会話が始まる前から持っている基盤である「核となる共通基盤(core common ground)」と、会話を共に経験することによって参与者間で構築される「創発的共通基盤(emergent common ground)」があるとしている。児島 (2021)では、女性多人数会話において発生した笑いの共有が「創発的共通基盤」の構築に機能することを明らかにしている。

さらに笑いを分析するための枠組みとして、Glenn (2003)による社会相互行為的アプローチを援用する。このアプローチでは笑いを、おかしさに対しての本能的な反応として発生するものではなく、社会的に相互行為上の何らかの目的を遂行するものとして扱う。そのため、分析する際には笑いを前後の出来事、参与者らの関係性、形式などの文脈とともに相互行為の流れの一部として分析する。

これらを整理すると、会話参与者らは「核となる共通基盤」をはじめとする、相手と共有していることが想定される知識を基に相互行為を行っており、この想定が実際と異なっていた場合に相互理解にエラーが生じ、修復などの方策を取る。また、相互行為の過程で、参与者らは言語行動および笑いを含む非言語行動を通して何らかの行為を実行しており、それが「創発的共通基盤」の構築に影響すると考えられる。このような分析枠組みに基づいてデータを観察することにより、布マスクに関しての政治風刺を通して笑いを共有する会話参与者らが、実際に相互行為上で何をどのように達成しているのか、また最終的に相互行為を通して何を共有しているのかを明らかにする。

3.2 データについて

本稿で扱うのは、筆者が 2018 年から実施している、のべ 30 名程度の女性を対象とする継続・縦断調査の一貫として収集した会話データである。従来は対面での会話を収録しているものの、

2020 年度の調査は COVID-19 の感染防止策として対面での接触を避けるため、Zoom を使用したオンライン通話を収録した。収録の際、筆者のビデオとマイクはオフにしておき、トピックの提供なども行わず、会話の進行は全て被調査者らに委ねている。彼女らは、高等学校時代からの友人同士である。このような収録方法により、被調査者の仲間内での自然に近い会話が観察できたと考える。

会話 参与者	収録日	収録場所	年齢	性別	職業	備考
AP	2020/04/30	オンライン 通話(Zoom)	25	女性	会社員	東京在住。4 月から新しい会社で働き始めた。
EH						東京在住。
KK						
NW					無職	両親と共にタイ、バンコク在住。今後タイにて働き始める予定。

表 1. 会話参与者の基礎情報

4. データと分析

前述のように本場面では、政府から配布された布マスクが話題となっている。参与者らはこの場面までに、タイに住む NW がいつ頃日本に来られるかなど COVID-19 の影響について話していたものの、政府の政策やマスクについて話題にしていたわけではなく、KK が唐突にマスクについて話し始めることでこの会話が始まっている。ここでは、会話参与者らが具体的に何を会話しているのか、特にどのように笑いを共有しているのかに注目して分析を行う。

[データ 1]

425. KK: アベノマスク届いた

426. ((マスクを画面に映す))

427. NW: え

428. AP: [私も届いた

429. NW: [((画面を覗き込む))

430. (1. 4)

431. EH: え: うち届いてたんかな:

432. KK: 臭いねんな:

433. NW: [1hahaha

434. AP: [1 え. 思った. [2 臭いそれ. [3 めっちゃ思った

435. EH: [2huhuhu

436. KK: [3¥ちょっと臭いよな:¥

437. 今[₄(鼻に近づけただけで)ちょっと臭かったもん
 438. [₄((手を鼻に近づける))
 439. NW:¥アベノマスク¥uhuhu
 440. AP:¥そ. 外側臭い¥
 441. KK: [¥な:臭いよな:¥
 442. EH: [huhuhuhuhu
 443. AP: ん:
 444. NW:¥洗濯し:¥
 445. KK: [((笑う))
 446. AP: [uhuhu

本データでは、KK が「アベノマスク届いた」(425 行目)と、実際のマスクを画面に映して見せたところから話題が開始される。その後 KK が「臭いねんな」(432 行目)と述べると、NW(433 行目)と EH(435 行目)が笑いで反応し、マスクが手元に届いているという AP も 434 行目でマスクが「臭い」ことに同意する。この 3 名の反応を受けて KK は今度は笑いを伴って「¥ちょっと臭いよな¥」(436 行目)と述べ、440 行目で「¥外側臭い¥」と述べる AP とマスクの匂いについての同意を形成する。この場面で注目したいのは、事前に前置きや説明などを行わず KK が 425 行目で「アベノマスク」という呼称を使用しており、聞き手である他の参加者らも当然のこととしてこれを受け入れている点である。また、KK が 432 行目で「アベノマスク」の匂いについての感想を述べると、他の参加者らは即座に同時発話を伴いながら笑いや同意を行なっている。AP のように KK の発言にすぐさま同意を行なっているのは、AP が会話以前からマスクの匂いに関して KK と同様の認識を持っていたためだと推測できる。また、NW や EH が笑いで反応しているのは、彼女らが KK の表出する政府から配布されたマスクを批判的に評価するスタンスを許容し、笑いの対象として受け入れたためだと言える。特に、直前の KK による 432 行目の発言が笑いを伴っていないのにも関わらず、NW は 433 行目において笑いで反応しているため、本会話で最初に KK のスタンスを容認し、会話の場において「マスクの匂い」を笑いの対象としたのは NW であると分析できる。逆に言えば、当初 KK が 425 行目で笑いを伴わずに「アベノマスク」に関して話題に挙げ、432 行目で批判的な意見を述べる前に 1.4 秒間の沈黙を置いていることを考慮すると、KK は友人との会話において政治的な話題を持ち込むことに対して慎重になっていたと分析できる。そのような場面において NW が笑いで反応したことにより、この会話において政治談話及び「アベノマスク」に関する批判的な内容が参加者間で受け入れられ、KK や他の参加者らもこのような話題に笑いながら参加しやすくなったと言える。

データ 1 では、政府から配布された布マスクを嘲笑する文脈で使われている「アベノマスク」という呼び方を、425 行目から KK が使用していることに顕著なように、参加者らは「アベノマスク」に対する視線や態度をメディアでの語られ方や周囲の者との会話を通して、相互行為開始以前からある程度共有していたと考えられる。つまり、「核となる共通基盤」(Kecskés and Zhang, 2009)として、布マスクは「欠点があり、笑いの対象となるもの」であるという認識を参加者らが保持

していたと言える。これに加えて、「手元に届いたマスクが匂う」という認識がデータ 1 で参加者間で共有されたことにより「創発的共通基盤」が構築され、データ 2 での空想上のストーリーの協働構築に繋がる。このような経緯によりデータ 1 では、「アベノマスク」が話題になり、それに対する批判的な感想が述べられた途端に参加者らが会話に参加し、共通認識に基づく笑い(早川, 2000)が共有されたと分析できる。

[データ 2]

447. KK: あれデコろかな: アベノ [マスク
448. NW: [¥あれダサくない? 給食用みたいな¥
449. AP: ¥ん: ね. 確かに¥
(中略)
458. NW: あれさ, おしゃれに色染めしたら?
459. EH: uhuhu
460. AP: huhu
461. EH: ¥いいやん¥
462. KK: 考えるわ: ゴールデンウィークめっちゃデコるわ:
463. AP: [¥ん: huhu¥
464. EH: [huhu
465. NW: ¥橙色とかにし(たら)¥
466. EH: huhu¥ラインストーンつけてや.
467. [1 いっぱいキラキラにしてさ¥
468. KK: [1 あ: ありかも
469. NW: [2 うん:: 縫い付け, 刺繍して刺繍
470. EH: [2 huhuhu うん¥刺繍 huhu(.) 刺繍¥
471. KK: [2 ((ラインストーンをつける仕草))
472. EH: [3 いいやん¥
473. KK: [3 ¥2 枚あるからさ¥
474. AP: ¥マスクの [意味がなくなる¥
475. EH: [huhu
476. NW: huhu
477. KK: ¥洗濯 [できる¥
478. EH: [¥バリ通気性悪そう¥
479. KK: ¥確かに¥
480. AP: ¥それな¥huhu
481. KK: ¥臭いし¥
482. AP: ¥死ぬわ: ¥

データ 2 で、参与者らは布マスクの見た目をいかに良くするかという空想上のストーリーを協働構築し、笑いを増幅させていく。447 行目で KK が「あれデコろかな:アベノマスク」と述べると、NW と AP が笑いながら布マスクの見た目の悪さに同意を示す。その後、NW が「あれさ、おしゃれに色染めしたら?」(458 行目)と見た目を改善するための提案を行うと空想上のストーリーが開始される。この発言を受けて KK は、「考えるわ:ゴールデンウィークめっちゃデコるわ:」(462 行目)とストーリーを発展させ、NW も「¥橙色とかにし(たら¥」(465 行目)と応じている。EH も「ラインストーンつけてや」(466 行目)、「うん¥刺繍 huhu(.)刺繍¥」(470 行目)と加わっている。このように「ダサイ」布マスクを、緊急事態宣言の影響でどこにも外出できない「ゴールデンウィークにデコる」アイデアとして、参与者らは「橙色に色染めし、ラインストーンを縫い付け、刺繍をする」という空想上のストーリーを笑いながら構築している。これに AP が「マスクの意味がなくなる」(474 行目)とツッコミを入れると、EH も「バリ通気性悪そう」(478 行目)と述べ、ストーリーのように加工をした場合、感染症を予防するというマスク本来の機能を果たさないことに同意し合い、ストーリーの構築が終了する。

マスクの見た目を良くするという内容の空想上のストーリーは、複数の参与者らによって詳細が付け加えられ、1 人の参与者が進めたストーリーを、別の参与者が引き受けて発展させるといったように協働で構築されている。ストーリーの内容に対する笑いは同時多発的に発生し、ほとんどの発話が笑いを伴っている。これは Glenn(2003)で明らかにされている *dramatized talk* を行う際に発生する笑いの共有であり、本場面のように複数人により笑いが続いているのは、参与者らがストーリーの内容に強くおかしさを感じているためだと言える。

このようにオーバーラップを伴いながらストーリーを協働で構築することが可能であったのは、データ 1 で「核となる共通基盤」に基づいて参与者らが笑いを共有したという経験により、お互いが政府により配布された布マスクを笑いの対象として許容する者同士であるということが「創発的共通基盤」として構築されたためであると言える。つまり、メディアでの報道などにより「政府から配布された布マスクの品質には欠点があり、嘲笑の対象となる」といった認識をそれぞれの参与者らが保持していたことがデータ 1 により表出し、その認識をお互いが持っていることを会話の場で確認し合っていた。また当時、政府から配布されたマスクをより効果的かつ見た目の良いものに加工するというアイデアやその方法はメディアでも多く取り上げられていたことから、この布マスクに関して「手を加えるとましになる」、「手を加えることは一種の流行的手段である」といったことを参与者らは既に共通認識として持っていたと推測できる。

このように、参与者らがメディアなどを通して会話以前から保持していた共通認識と、データ 1 での会話で共有した「アベノマスク」に対する認識が共通基盤となり、データ 2 での空想上のストーリーの構築に繋がったと言える。共通基盤に基づいていることから、参与者らはオーバーラップを伴いながら協働で 1 つの空想上のストーリーを構築することができたと分析できる。実際に参与者らが提案した改善方法は COVID-19 を予防することに効果的ではなかったものの、「政府から配布された布マスクは欠点があるため、自分たちが何らかの手を加える必要がある」という認識が笑いと共に共有されていた。これにより政府から配布された布マスクを嘲笑の対象とする批判的な視線および態度は、空想上のストーリーの協働構築と笑いの共有を通して強化された

と言える。

5. 考察

5.1 「アベノマスク」を対象とする笑いのプロセス

本節では、本研究で分析を行った笑いの共有プロセスの特徴を明らかにし、観察された相互行為上では何が達成されていたかについて考察する。データ 1 では、参加者の 1 人である KK が最初に「アベノマスク」について話題に出した際に笑いは伴っていなかった。しかしその後、KK が述べる「アベノマスク」に関する批判的な意見を聞くと、聞き手の参加者らがそれに笑いで反応したためこの会話において政治談話及びそれを笑いの対象とすることが受け入れられ、またこれに参加者ら全員が参加する様子が観察された。データ 2 では、データ 1 での経験により構築された「アベノマスクには欠点があり、笑いの対象として許容される」という認識に基づいて、空想上のストーリーの協働構築を通して笑いが共有されていた。このように、本データで観察された笑いは、参加者の 1 人である KK が「アベノマスク」の匂いに関しての意見を述べると、聞き手であった参加者らも即座に同意を表明し、笑いでその反応を示していた点、参加者ら全員が笑いの対象となる空想上のストーリーに関わり協働で構築していた点が特徴的である。

このような参加者全員が参加する共通認識に基づく笑い(早川, 2000)が可能であったのは、既に社会的風潮として「アベノマスク」の品質およびそれを各家庭に 2 枚配布するという政策には欠点があるといった内容が笑いの対象として扱われてきたためだと考えられる。このような「アベノマスク」に関する共通認識が「核となる共通基盤」として会話開始以前からメディアや周囲の者との会話を通してある程度構築されていたことに加え、データ 1 で互いが「アベノマスク」を笑ってもいいと思っていることが「創発的共通基盤」として確認されたことにより、参加者らがある程度安心感を持ってこのような笑いを会話に導入、そして参加をすることができたのだと推測できる。このような背景から、日本では公的、私的どちらの場においても政治風刺が避けられる傾向にあるにも関わらず、本データでは日常的な 20 代女性らによる友人同士の会話において「アベノマスク」を対象とする笑いが共有されたと考察できる。このようなプロセスにより、参加者らは「アベノマスク」に対する批判的なスタンスを強めたと言える。また、空想上のストーリーを協働構築することによって共有される笑いが共通基盤を確認および強化する機能を持つことが明らかになった。

5.2 参加者らが表出した「アベノマスク」に対しての意識

データ 1、2 を通して参加者らが、各家庭に布マスクを 2 枚配布するという政策や布マスク自体を有難いと述べるような場面は一切観察されなかった。マスク不足が社会現象になっていたため、参加者らもマスク不足の状態をある程度身近に経験したはずであるにも関わらず、本データで観察されたのは、布マスクの匂いや見た目が悪いことに関しての同意に基づく笑いの共有、またそれを茶化するような内容の空想上のストーリーの協働構築であった。このような相互行為を通して参加者らは、布マスクを「身に着ける上で欠点があるもの」、「自分たちが手を加えて改善する必要があるもの」として意味付けていたと言える。データ収集時点で彼女たちの手元にマスクが十

分に在ったかは不明であるが、本データでの会話から参加者らが政府から配布された布マスクを必要としておらず、COVID-19 の感染防止対策に効果があるものとして評価していなかったことは明らかである。むしろ、これを笑いの対象として仲間内で笑いを共有することにより、参加者らは緊急事態宣言下において自由に行動することができず、今後の見通しも不透明であった状況において、互いが「アベノマスク」を巡って同様の認識を持っていることを確認し合っていた。

6. 結語

本稿では 20 代の女性たちによる友人同士での会話をデータとし、COVID-19 の感染対策に必要なマスクが不足していた状況において安倍元総理が発表した各家庭に布マスクを 2 枚配布するという政策がどのように参加者間で語られているかを明らかにした。参加者らは、この政策により一部の参加者らの元に届いていた布マスクの匂いや見た目といった品質を笑いの対象とし、空想上のストーリーを協働構築することで笑いを共有していた。このような政治的な内容を含むセンシティブとも言える笑いを参加者らが共有するに至った背景には、この布マスクが「アベノマスク」と揶揄され、既にその欠点が笑いの対象としてメディアで語られていたことが挙げられる。このような分析により、Lee and Jang (2017)が明らかにしたように、本データでもメディアでの語られ方が日常的な相互行為にも影響を与えることが確認された。

これに加え、本データが正に緊急事態宣言下で収録されていることも会話に影響を与えていると考えられる。COVID-19 というクライシスにより、参加者らは政府の政策や発表が直接的に自分たちの生活に影響を与えることを経験したと言え、このような経験に基づく思考が友人同士との日常的な会話にも表出したと言える。言うなれば、2020 年 4 月後半の時点で COVID-19 を巡る状況が参加者らの日常となっており、それに関連する政府の動きも参加者らが自分たちに影響を与えるものとして認識していたと推測できる。だからこそ、参加者らは友人同士との日常的な会話場面において政治風刺を対象に笑いを共有したと考えられる。今後、継続して調査を行うことで参加者らの相互行為が COVID-19 を巡る状況の変化を受けてどのように変化していくのか、観察して行きたい。

参考文献

- Clark, H. H. (1996). *Using Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Davies, B. & Harré, R. (1990). Positioning: the discursive construction of selves. *Journal for the theory of Social Behavior* 20, 43-63.
- Dynel, M. (2021). COVID-19 memes going viral: on the multiple multimodal voices behind face masks. *Discourse & Society* 32(2), 175-195.
- Glenn, P. (2003). *Laughter in Interaction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 早川治子. (2000). 「相互行為としての「笑い」－自・他の領域に注目して－」、『文教大学文学部紀要』, 14(1), 23-43.
- Hmielowski, J. D., Holbert, R. L., & Lee, J. (2011). Predicting the consumption of political TV satire: Affinity for political humor, the daily show, and the colbert report. *Communication Monographs*

78, 96–114.

Jefferson, G. (1979). A technique for inviting laughter and its subsequent acceptance declination. In G. Psathas (ed.), *Everyday Language: Studies in Ethnomethodology*, 79-96. New York: Irvington.

Kecskés, I. and Zhang F. (2009). Activating, seeking, and creating common ground: A socio-cognitive approach. *Pragmatics and Cognition* 17 (2), 331-355.

児島麦穂. (2021). 「笑いと言説のシナリオによる共通基盤化プロセス—女性多人数会話の談話分析—」, 『語用論研究』 22, 51-73.

Lee, H. and Jang, S, M. (2017). Talking about what provokes us: political satire, emotions, and interpersonal talk. *American Politics Research* 45 (1), 128-154.

難波彩子. (2018). 「男女の会話の共創 リスナーシップとアイデンティティ」, 村田和代編『聞き手行動のコミュニケーション学』, 209-240, ひつじ書房.

岡本弘基. (2004). 「政治の話はタブーなのか—インターネットユーザーに対する実証分析から—」 『中央調査報』 577, 1-16.

[トランスクリプト記号]

[オーバーラップ記号	¥¥ 笑いながらの発話	, 音節の区切り
(.) 0.2 秒以下の沈黙	(()) ジェスチャー	? 質問
(0.0) それ以上の沈黙	: 長音	() 不明瞭な発話
- 言い淀み	= 続けて聞こえる発話	

新型コロナウイルス流行下における傷つきの社会文化的意味の予備的考察
—Twitterにおける「傷つく」の使用から—

中川 佳保

1. はじめに

1.1 背景と目的

傷つくことに敏感になり、自分や相手を傷つけないようにすることが、現代の日本社会において、一つの潮流をなしている。例えば、大平（1995）や土井（2008）では、自分や相手が傷つかないように人間関係を構築する青年たちの姿が描かれている。また、和田（2004）や信田（2013）、井川（2019）のように、青年に限らず、自分のことを傷つきやすいと考えている人や傷ついた経験を持つ人に向けてアドバイスをするような一般向けの著作も発行されており、傷つくことはそれだけの関心を集めていると考えられる。もちろん、傷つきやすさには個人差があるのだが、昨今では、傷つきにくいと自認している人であっても、傷つくこと（以下「傷つき」とする）に注意を払わなければならないとなっている。というのは、たとえ自分が傷つきにくくとも、相手を傷つけないよう配慮することが社会的に要請されるようになってきているからである。その証左として、トラウマの判断基準が被害者の主観に依拠するようになってきていることや（Lukianoff & Haidt 2018: 26）、ハラスメントが「他者に対する発言・行動等が本人の意図には関係なく、相手を不快にさせたり、尊厳を傷つけたり、不利益を与えたり、脅威を与えること」¹と定義づけられていることが挙げられる。

本研究の目的は、「傷つく」という言葉が使われるコミュニケーション出来事、特に、「傷つく」という言葉を含む **Twitter** 上の投稿を言語人類学の枠組みを用いて分析することで、現代の日本社会において忌避されている傷つきがどのような社会文化的意味を持つものなのかを明らかにするための予備的考察をすることである。

1.2 本稿における「傷」の範囲

「人が傷つく」という場合の「傷」には、トラウマや、ハラスメントによるもの、いずれにも含まれないものがある。トラウマを簡単に定義すると、「心の傷」(宮地 2013: i) や「心に残った傷」(小西 2006: 24) となるが、「精神医学や心理学の分野では、過去の出来事によって心が耐えられないほどの衝撃を受け、それが同じような恐怖や不快感をもたらし続け、現在まで影響を及ぼし続ける状態」(宮地 2013: 3) と捉えられている。トラウマは、軽く「あのことがトラウマになっちゃって」などと言えるような単なる心の傷ではなく、言葉にすることができなかつたり、その話題になるとその場を離れたくなったりするほどの深い傷である (ibid.)。また、トラウマの特徴として、それをもたらすのが衝撃的な出来事であるという点も挙げられる (ibid.)。具体的には、戦争、強盗や殺傷事件などの犯罪被害、性暴力、家庭内暴力、虐待、自然災害、交通事故、

1

<https://www.osaka-med.ac.jp/deps/jinji/harassment/definition.htm#:~:text=%E3%83%8F%E3%83%A9%E3%82%B9%E3%83%A1%E3%83%B3%E3%83%88%E3%83%BC%88Harassment%E3%81%A8%E3%81%AF%E3%81%84%E3%82%8D%E3%81%84%E3%82%8D,%E3%82%92%E3%81%94%E7%B4%B9%E4%BB%8B%E3%81%97%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82>

ビルの倒壊、火災、災害、拷問、いじめ、ハラスメントなどがあげられる（ハーバート 1999; 小西 2006; 宮地 2013; 小西ら 2018）。

トラウマの反対側には、自力で、短期間で対処できるものが位置づけられる。例えば、特別養護老人ホームの介護労働者が利用者やその家族からの言葉で傷ついた体験をどのように乗り越えたかをインタビュー調査した吉田（2011）は、乗り越えた方法に、深く考えずに割り切る、忘れる、気分を変えるとといった、個人的な対処法がとられていたことを報告している。

本稿で捉えようとするのは、このように、トラウマのように医療制度の中で治療を要することも、ハラスメントのように組織での制度的な措置をとることもない程度の、日々にありふれた傷つきである。また、マイクロアグレッション（Sue et al. 2007）のようにレイシズムなど特定の文脈に限らず、あらゆる場面でだれもが経験しうる傷つきを対象とする。

2. 研究方法

2.1 データ

本稿では、「傷つく」という言葉が生起する出来事の一つとして、SNS（ソーシャルメディア・ネットワークキング・サービス）の Twitter から収集したデータを分析する。具体的には、Twitter 上の検索機能を用いて、(a)「傷つく」（あるいは「傷付く」、「きずつく」）を含み、(b)2020 年 1 月 1 日から同年 12 月 31 日の間に投稿され、(c)1000 以上の「いいね」がつけられたツイートおよびそれにツリー機能を用いてつながられたツイートのうち、(d)「コロナ」が使用されているものを分析する。該当するツイートは全 5 件 12 ツイートであるが、紙幅の都合上、そのうち 2 件（3 ツイート）を本稿では取り上げる。ここで、(c)の条件設定の動機として、「いいね」の意味について補足しておく。Twitter 社のヘルプセンターによると、「いいね」とは、「ツイートに対する好意的な気持ちを示すために」使われる²。また、評論家の荻上チキと社会心理学者の高史明が行ったアンケート調査³によると、ユーザーが「いいね」をするのは、投稿を面白いと思ったとき（62.7%）、投稿に共感したとき（55.9%）、投稿を重要な情報だと思ったとき（43.3%）、投稿を後から読み返したいとき（22.6%）であった。後半の二つの場合には、必ずしもユーザーが「いいね」した投稿に対して好意的あるいは肯定的な気持ちを持っているとは限らないが、少なくともユーザーがその投稿に関心を寄せているとはいえるであろう。したがって、(c)に挙げた 1000 以上の「いいね」を得た投稿というのは、ある程度広く、社会的に、肯定的な感情や関心を集めたものであり、そのようなツイートを分析することは本稿の目的に適していると考えられる。

2.2 分析に用いる概念

ツイートを分析するにあたって、本稿は、言語人類学の枠組みに依拠する。まず、本稿の分析に通底する概念として、コンテキスト化とテキスト化（小山 2008; 榎本 2019）について説明する。これは、ある出来事が、それを取り巻くコンテキストを指標するあるいは指し示すこと（コンテキスト化）を通じて、そのコンテキストとの関連性のなかで、社会文化的に意味をもつテキストとして認識可能になる（テキスト化）、というプロセスを概念化したものである。指し示されるコンテキストには、例えば、それまでの発話や参加者、そのやりとりの目的、やりとりの媒

² <https://help.twitter.com/ja/using-twitter/liking-tweets-and-moments> 2021/03/31 最終アクセス

³ <https://www.buzzfeed.com/jp/kensukeseya/iine-twitter-1> 2021/03/31 最終アクセス

体、規範などがあるが、理論上はあらゆるものがコンテキストとなりうる。また、コンテキストの指標には、前提的な指標と創出的な指標という二種類がある（Silverstein 1976）。前提的な指標とは、ある言語使用をその状況において適切なものとするようなコンテキストの指標のことであり、創出的な指標とは、ある言語使用によって明示化されたり（made explicit）つくりだされたり（made to exist）するコンテキストの指標のことである。例えば、食卓で塩をとって欲しいときに言う「それとって」という言語使用は、「それ」が指示する塩がなければ、意味が分からないものとなる。このような場合に、食卓に塩があるという状況が前提的なコンテキストとして指標され、また、そのコンテキストが指標されることで、「それとって」が「塩をとってほしい」と要求する発話として認識可能なテキストとなる。また、普段はタメ口で話している友人にお金を借りるときに「お金を貸してくれませんか」と敬語を使用することは、その時に友人との間に社会的な距離があるというコンテキストを創出的に指標する。

先に理論上はあらゆるものがコンテキストとなりうると述べたが、ある言語使用がどのようなコンテキストを指標するかは、実際のコミュニケーションではある程度決まってくる（さもなくば、その言語使用は解釈できない）。これは、その言語使用がどのコンテキストを指標するかを統制する（メタ語用的に機能する）記号の働きによる。メタ語用的に機能する記号にはいくつかあるが、本稿の分析で重要となるのは、詩的機能（Jakobson 1960）である。詩的機能とは、Jakobson（1960）が示した 6 機能モデルに含まれるものである。Jakobson は、コミュニケーション出来事の構成要素としてメッセージ、メッセージの送り手、メッセージの受け手、メッセージが伝達されるための経路、メッセージの言及対象、メッセージが解釈されるコードの六つを定め、メッセージにはそれぞれの要素を志向した機能があるとした。詩的機能は、六つの要素のうちメッセージそのものを志向した機能で、「等価の原理を選択の軸から結合の軸に投影するもの」ものである（ibid.: 358）。詩的機能に関して重要なのは、類似した形式の反復によって、その形式を一つのテキストとして解釈可能にしたり、その反復が生起する出来事をまとまりや結束性があるものとして解釈可能にしたりすることである。詩的機能が卓越して役割を果たすのは、韻文やだじゃれであるが、言語形式だけでなく、儀式のような相互行為の次元にも、また、日常的、散文的なコミュニケーションにも詩的機能はみられる（Silverstein 1985; 榎本 2019）。また、詩的機能が作用する反復構造は、その相互行為の参加者にはあまり明瞭には意識化されないという特徴がある（小山 2011）。

以上の概念を用いて、「傷つく」を含むツイートのテキスト化のプロセスを分析していく。特に、「傷つく」という言葉が生起する出来事に共通する構造はないか、あるとしたらどのようなものか、「傷つく」という言葉の生起によってどのようなコンテキストがその出来事に関連づけられるのか、といった点を明らかにしていくことで、「傷つく」と言うことや傷つきが持つ社会文化的意味の検討を試みる。

3. 分析

3.1 「みんな違って、全部いい」

分析する一つのツイート⁴は、以下の、2020 年 2 月 28 日に投稿された、あるバンドのメンバーによるものである。() 内の数字は筆者による。

テレビや Twitter での僕の発信は、賛否を測りたい訳でも、言い争いをさせたい訳でもないです。だからどんな意見があってもいいんです。 (①)

立ち向かうべきはコロナウイルスという認識はみな同じ。 (②)

それ以外の部分で、賛否で、言い争いで、鬨い傷付く必要はないと思います。 (③)

みんな違って、全部いい。 (④)

このツイートでは、改行によって文の間に空白が作られ、ツイート全体の中に四つのまとまりができています (①～④)。

①は、「テレビや Twitter での僕の発信」という言葉で始まっている。これは投稿主の Twitter での過去の発信をその指示対象の一部に含むと考えられるが、のちに続く「賛否を測りたい訳でも、言い争いをさせたい訳でもない」という部分から、「僕の発信」が「賛否」や「言い争い」が生まれるきっかけ (コンテキスト) となっていることがわかる。Twitter では、「いいね」や RT 機能 (転送機能) によって投稿が拡散されるにつれて、投稿に対するリプライや言及、つまり、「賛否」や「言い争い」が増えていく。そのような Twitter 上の投稿を遡って探してみると、2 月 26 日に、首相からのイベントの中止・延期要請をうけて、3 月 1 日に開催予定であったライブを中止するという発表をしたツイート⁵が投稿されていた。このツイートのリプライ欄には、投稿主のバンドのファンに限らず、様々なアカウントから、賛同や批判のコメントが集まっている (分析対象のツイートに対してはファンと思われるアカウントからの支持や賛同、応援のコメントがほとんどであるのと対照的である)。さらに、翌 27 日には、ライブ中止に関して投稿主がテレビ朝日からインタビューを受け、テレビ番組で報道されるという旨がツイートされている。したがって、①で言及されている「テレビや Twitter での僕の発信」は、26 日の投稿やそれに関連するテレビ番組出演での発信を指しており、「賛否」と「言い争い」は、それらの発信に対する反応であるといえよう。言い換えると、①は、これらの過去のコミュニケーションが前提的に指標しており、それに対する反応というコミュニケーションに対して投稿主が「賛否」や「言い争い」を生みたいわけではなかったと見解を示すという、メタ的な発信になっている。

②では、「コロナウイルス」という明示的な言語使用によって、新型コロナウイルス流行という社会的なコンテキストが言及されている。「立ち向かうべきは」によって、対立すべき相手はコロナウイルスであるという構図が、また、「みな同じ」の部分では、「みな」と言うことによって、

⁴ <https://twitter.com/Ace8trriger/status/1233352581683875840> 2021/03/31 最終アクセス

⁵ <https://twitter.com/Ace8trriger/status/1232599341912641537> 2021/03/31 最終アクセス

①で「賛否」や「言い争い」で対立していた人々が一つのグループに属するというコンテキストが創出されている。つまり、②では、①で「賛否」や「言い争い」で対立していた人々を「みな」としてひとくくりにし、その「みな」と新型コロナウイルスを対立させるという構図が創り出されている。

③では、最初に「それ」という代名詞が使用されているが、この「それ」は②の部分を示すものであり、それによって③と②との結びつきが強まっている。また、①で使用された「賛否」と「言い争い」が繰り返されているが、ここでは、①を前提とした③での繰り返しという形で①と③の間に連続性やまとまりが生み出されている。また、そのような「賛否」と「言い争い」を「コロナウイルス」へ立ち向かうこと以外の部分として位置づけることで、①から③までの間の関連性が生み出されている。また、③の「**賛否で、言い争いで、闘い傷つく必要はない**」という部分では、投稿主の過去の発信に起因する「賛否」や「言い争い」によって誰かが傷ついていることや、「賛否」や「言い争い」が誰かを傷つけるものであることが前提的にコンテキスト化されている。また、「必要はない」という部分では、傷つくという経験に対する投稿主の否定的な価値観が指標されている。

そして④では、「みんな違って、全部いい。」と、賛否や言い争いに表出する「みんな」の違いを「全部いい」という言葉で肯定して、ツイートを締めくくっている。「全部いい」という部分は、①の「どんな意見があってもいい」という部分と使用されている語彙は異なるものの、言及指示的な意味（言われていること）が類似しており、この点で①と④の間には類似性が見出される。こうして、①から③までの関連性と、①と④の間の類似性によって、このツイートが一つのまとまりをもつように結び付けられている。⁶

ただし、①は、投稿主の過去の発信に対して起きた「賛否」や「言い争い」に対して「どんな意見があってもいい」と述べられたものであるのに対して、④は、②と③を経て、「賛否」や「言い争い」によって傷つく必要はないという価値観を前提とした、「みんな違って、全部いい」という肯定となっている。ここでは、「みな」の意見の違いをそのままにしたまま「全部いい」と肯定することで、傷つきを防ぐ、あるいは回避することが志向されている。つまり、①と④の間には類似性があるものの、④では、②と③を通じて、「全部いい」というメッセージが、傷つきの回避を志向した道徳律のようなものに変容しているのである。

まとめると、このツイートでは、まず、過去のコミュニケーションに対するメタコミュニケーションという形をとって、投稿主の過去の発信が前提的なコンテキストとなって生まれた賛否や言い争いに対し、投稿主はそれを望んでいたわけではないことが示されている。そして、対立する人々を「みな」と一つにまとめ、その対立すべき相手を新型コロナウイルスとすることによって、「みな」の間の賛否や言い争いで傷つくことを必要ないものとしている。これらを受けて、最後には、「みんな違って、全部いい」と「みな」の間の違いを肯定して締められている。

3.2 悩み

次の分析データは、2020年4月9日に投稿された匿名アカウントによる以下のツイート^{7,8}であ

⁶ ④の「みんな違って」と②の「みな同じ」との矛盾については、4.で取り上げる。

⁷ <https://twitter.com/badassceo/status/1248188816575217665> 2021/03/31 最終アクセス

⁸ <https://twitter.com/badassceo/status/1248188902793302022> 2021/03/31 最終アクセス

る。このアカウントは、プロフィール欄に「筋トレが好きです！」とあるように、主に筋トレを推奨するツイートをしている。また、筋トレを推奨するという体をとって（時にはとらず）、いわゆる「メンタル」が弱い人に対するアドバイスのようなツイートもしている。以下で分析するツイートは、ツリー機能を用いて二つのツイートが一つにつなげられたもので、二つ目のツイートで「傷つく」が使用されている。以下のツイートは、3.1 で分析したものとは異なり、改行がされていないため、一文ごとに番号が付されている。

コロナが出現する前に抱えてた悩みの9割ぐらいどうでも良くなってない？(⑤)俺はなってる。(⑥) 巨大な問題が襲いかかってくると今まで悩んでいたことがどうでもよくなるこの感覚、俺は嫌いじゃない。(⑦) 悩みなんてその程度の存在だと思えると目の前の悩みもぶっ飛ばしてやろうという気力と勇気が湧いてくる。(⑧)

とはいえ、悩みに大小なんてないということは常に認識しておかなければならない。(⑨) 絶対に人の悩みを笑ったらダメ。(⑩) 外から見ると大したことないように見える悩みでも、悩んでる本人にとっては死活問題だったりする。(⑪) それを笑うと笑われた人はとても傷付き、人としてやっちゃいけない行為だと思います。(⑫)

この二つのツイートでは、二つにまたがって「悩み」という名詞と「悩む」という動詞が繰り返されており(⑤、⑦、⑧、⑨、⑪)、それによって二つのツイートに一つのまとまりが生み出されている。しかし、以下に述べる通り、二つのツイートの間には差異もある。

まず一つ目のツイートでは、「コロナ」という「巨大な問題」の出現によって、それまでの「悩み」がどうでもよくなるという感覚を投稿主が抱えていることが述べられている。ここでは、「コロナが出現する前に抱えてた」という表現によって、新型コロナウイルス流行の前と後という認識枠組みが創り出されており、前と後で悩みに対する投稿主の捉え方が変化していることが述べられている。また、新型コロナウイルス流行は「巨大な問題」として悩みと対比される対象とされ、悩みを小さくするものとして語られている。そして、それが今度は前提的なコンテキストとなって、「その程度の存在だと思えると目の前の悩みもぶっ飛ばしてやろうという気力と勇気が湧いてくる」と、悩みに対して積極的に向き合う投稿主の姿勢を示すテキストとなっている。

続く二つ目のツイートでは、「とはいえ」という逆接の接続詞を用いて、悩みに大小はなく、人の悩みを笑ってはいけないと述べられたのち、人の悩みを笑うという行為が、その人を傷つけるものであり、かつ、やってはいけない行為であるとされている。ここでは、人を傷つける行為はやってはいけないことであるという価値観が前提的にコンテキスト化されており、この価値観が、人の悩みを笑うという行為の禁止という形で表れている。また、このツイートの詩的構造をみると、⑨と⑪が、悩みに大小はないことを(「悩みに大小なんてない」、「外から見ると大したことないように見える悩みでも、悩んでる本人にとっては死活問題」)、⑩と⑫が、悩みを笑ってはいけないことを(「絶対に人の悩みを笑ったらダメ」、「それを笑うと...人としてやっちゃいけない行為」)伝えるというふうにペアを成しており、一文おきに言い換えをするような構造になっている。これは、前半部分を後半部分で言い換えるような構造としてもみなすことができ、この構造によって⑨から⑫の間に関連性が生み出されている。

二つのツイートを比べてみると、⑨における「悩みに大小はない」という価値観の導入は、一

見、「悩みなんてその程度」と述べていた⑤と矛盾するように見える。しかしながら、一つ目のツイートでは「俺」という一人称代名詞が繰り返されているのに対して、二つ目のツイートでは「人」という名詞が繰り返されているという対比に注目すると、一つ目のツイートは「俺」すなわち投稿主個人の悩みに対する見方について、二つ目のツイートは「人」すなわち他人の悩みに対する見方について言及したツイートであるという対照的な解釈が可能となる。また、前者では新型コロナウイルス流行という問題の出現によって悩みが小さくなっているのに対して、後者では、悩みに大小はないと、各人にとっての悩みの大きさの判断を留保するというように、悩みの大きさも対照的に創り出されている。さらに、一つ目での「俺」、二つ目での「人」の繰り返しという対比を名詞句階層 (Silverstein 1981) に照らして捉えなおしてみると、⑤で使用されている「俺」は発話者を指示する一人称単数代名詞であり、より「今・ここ」に近いのに対して、⑥で使用されている「人」は存在名詞であり、「今・ここ」で起きている個別の発話出来事の外部に位置づけられる。このことから、⑤で述べられている、新型コロナウイルス流行という問題の出現によってそれまでの悩みがどうでもよくなるという感覚が嫌いではないのは、あくまで「今・ここ」の「俺」つまり投稿主に限った感覚である一方、⑥で述べられている、悩みに大小はなく、人の悩みを笑うことは人を傷付ける行為であるやっではいけないという道徳的な主張は、「俺」に限らず、「人」に関する、より脱コンテクスト的な、すなわちよりマクロな次元に位置づけられていると考えられる。また、このような、投稿主個人に関わる部分から、個人間の差や違いに注意を向け、道徳的な、より抽象的な道徳律に着地するという展開は、3.1 で分析したツイートと共通するものである。

3.3 二つのツイートに共通する構造

ここまで、二つのツイートを個別にみてきたが、「傷つく」という言葉が生起するツイートとして、両者に共通する構造を探てみたい。

まず、前節の最後に触れた通り、どちらのツイートも、(a) 投稿主個人にまつわる事柄からはじまって、(b) 投稿主以外の個人間の違いを否定すべきでないものとして示し、(c) より抽象的な道徳律で終わるという展開になっている。3.1 のツイートは、(a-1) ①の「テレビや Twitter での僕の発信は、…」という投稿主「僕」の過去の発信の言及から始まり、(b-1) 「どんな意見があってもいいんです」と意見の差異の容認ののち、(c-1) ④の「みんな違って、全部いい」という道徳的な主張で終えられている。また、3.2 のツイートにおいては、(a-2) 一つ目のツイートの⑤から⑧までが「俺」の悩みに対する姿勢に関するものとなっており、(b-2) 二つ目のツイートの⑨と⑪で悩みに大小はなく外からは本人の悩みの大きさはわからないことが述べられ、(c-2) ⑩と⑫で悩みを笑うことが人として絶対にしてはならない行為であるという道徳律が示されている。このように、今回分析した二つのツイートはいずれも、投稿主個人の話題から、個人間の差異の容認を経由して、道徳律に至るという構造となっている。

また、「傷つく」が生起している部分を軸に二つのツイートをみると、どちらも、(d) 前半部で誰かを傷つけるとされている行為が否定的に語られ、(e) 「傷つく」の直前でその行為への言及が繰り返され、その行為によって誰かが「傷つく」ことが述べられ、そして、(f) その行為はする必要がない、あるいはすべきでないものであるという主張の反復に続くという構造になっている。具体的には、3.1 のツイートでは、(d-1) まず①で「賛否を測りたい訳でも、言い争いをさせたい訳でもない」と「賛否」や「言い争い」が投稿主の望まないものであることが示され、(e-1) ③

で再度「賛否」と「言い争い」への言及があり、「賛否で、言い争いで傷付く」と、それによって誰かが傷ついていることが、(f-1) さらに、それに続く部分で、「傷付く必要はないと思います」と、その行為は必要ないものであることが再度言われている。また、3.2 では、(d-2) まず⑩で「絶対に人の悩みを笑ったらダメ」と人の悩みを笑うという行為を禁止し、(e-2) ⑫で「それを笑うと笑われた人はとても傷付く」と、その行為によって人が傷付くことが、(f-2) またそれに続いて「人としてやっちゃいけない行為だと思います」と、⑩の繰り返しで、その行為がしてはいけないものであることが主張されている。この構造においては、人を傷つけるとされる行為がまず否定的に位置づけられ、その行為が誰かを傷つけることを根拠として、再度その行為を、必要ない、あるいはしてはいけない行為として、否定している。これは、行為を制限する根拠として傷つきを用いているともいえるだろう。

4. 考察

ここまで、二つのツイートを個別に分析し、それらに共通する構造として、投稿主の話題から個人間の差異の容認を通して道徳律に至るという展開、誰かが傷つくことを根拠としてさしはさんだ、誰かを傷つけるとされる行為の制限・禁止の繰り返しという二つを見出した。本節では、一つ目の構造がはらむ矛盾を切り口に、二つの関係を考察する。

まず、一つ目の構造の矛盾について説明する。注目したいのは、個人間の差異を容認（あるいは強調）していながら、抽象的な道徳律を唱えるという部分である。道徳律というのは、それが作用する集団、本稿で分析したツイートでいえば、「みんな」(④)や「人」(⑫)の均質性、同質性を前提としたものである。しかしながら、同時に、「みんな違って、全部いい」(④)、「悩みに大小なんてないということは常に認識しておかなければならない」(⑨)と、個人間の差異、異質性を強調し、受容するよう促している。つまり、個人間の異質性を強調するツイートで、同質性を前提とした道徳律が説かれているという矛盾が起きているのである。

では、ここで前提とされている同質性とは、どのようなものなのであろうか。その同質性を指し示す手がかりとして、二つ目の構造である、傷つきを根拠とした行為の制限・禁止を導入する。繰り返しになるが、3. で分析したツイートでは、「賛否で、言い争いで傷付く」(③)、「それ（本人にとっては死活問題である悩み）を笑うと笑われた人はとても傷付く」(⑫)というように、「賛否」や「言い争い」や「悩みを笑われる」ことが、人を傷つける行為とされており、そのことを根拠として、これらは「必要がない」、「人としてやっちゃいけない行為」とされていた。3. では、こうした行為の制限や禁止が、傷つきの回避を志向したものであると述べたが、ここでのさらなる前提として、「賛否」や「言い争い」や「悩みを笑われる」ことによって人が傷つくものであること、それほど人が傷つきやすい存在であることが挙げられる。したがって、本稿の分析対象のツイートで前提とされている同質性の一つの候補として、このような、人の傷つきやすさが考えられる。

このことをふまえると、分析対象となったツイートでは、投稿主に関する話題を起点として、個人間の異質性を強調しながらも、人の傷つきやすさという同質性を前提として、道徳律のような主張がされていると考えられる。もちろん、傷つきやすさにも個人間で差異があるのだが（西谷 2017）、その差異はここでは捨象され、傷つきやすさが均質的なものとされている。また、こうしたツイートを通じて、異質性が強調される裏で、人の傷つきやすさがさらに前提化されていると考えられる。

5. 結語

本稿では、「傷つく」という言葉が生起するツイート2件を対象として、特に詩的構造に注目しながら、それぞれのツイートがどのような構造を持っているのか、また、二つのツイートに共通する構造を分析した。共通する構造として、(1) 投稿主の話題から、個人間の差異の容認を通して、道徳律に至るという展開、(2) 誰かが傷つくことを根拠としてさしはさんだ、誰かを傷つけるとされる行為の制限・禁止の繰り返しという二つを見出した。また、(1) にみられる同質性と異質性の矛盾に着目して、分析対象のツイートが、個人間の差異を強調しながらも、人の傷つきやすさは均質的なものとして前提とされていることと、そうしたツイートを通じて、人が傷つきやすいことがさらに前提化されている可能性を考察した。

今後の研究では、本稿であまり触れられなかったコンテクスト化のパターンに焦点を置いた分析が必要である。また、本稿の分析はあくまで予備的なものであり、本稿で見出した共通する構造は、分析対象以外のツイートにも必ずしも適用できるわけではないため、さらに分析事例を増やし、構造のパターンを類型化していくことも今後の課題である。他に、本稿で分析したツイートは、いずれも傷つく主体が投稿主ではなく、第三者の視点から「傷つく」が使用されていたが、投稿主が傷つく主体である場合も射程に含む必要があるだろう。これらを通じて、「傷つく」という言葉の使用や、傷つきがもつ社会文化的意味の諸相を多面的に明らかにしていく。

参考文献

- Jakobson, R. (1960). "Closing statement: Linguistics and poetics." In T. Sebeok (Ed.), *Style in language* (pp.350-377). Cambridge: Massachusetts Institute of Technology Press.
- Lukianoff, G. & Haidt, J. (2019). *The Coddling of the American Mind: How Good Intentions and Bad Ideas Are Setting Up a Generation for Failure*. UK: Penguin Books.
- Silverstein, M. (1976). "Shifters, linguistic categories, and cultural description." In Keith H. Basso and Henry A. Selby (Eds.), *Meaning in Anthropology* (pp.11-55). Albuquerque, N. M.: University of New Mexico Press.
- Silverstein, M. (1981). Case marking and the nature of language. *Australian Journal of Linguistics*, 1, 227-247.
- Silverstein, M. (1985). On the pragmatic "poetry" of prose: parallelism, repetition, and cohesive structure in the time course of dyadic conversation. In Schiffrin, Deborah (Ed.), *Meaning, Form, and Use in Context: Linguistic Applications* (pp. 181-199). Washington, DC: Georgetown University Press.
- Sue, D. W., Capodilupo, C. M., Torino, G. C., Bucceri, J. M., Holder, A. M. B., Nadal, K. L., & Esquilin, M. E., 2007, "Racial Microaggressions in Everyday Life: Implications for Clinical Practice." *American Psychologist*, 62: 271-86.
- 井川裕覚 (2019). 『他人の言葉に傷つくあなたは幸運な人』 双葉社
- 大平健 (1995). 『やさしさの精神病理』 岩波新書
- 小西聖子 (2006). 『増補新版 犯罪被害者の心の傷』 白水社
- 小西聖子・金子雅臣・大塚雄作 (2018). 「VI ハラスメント防止委員会企画講演 ハラスメント被害者の心理的回復」教育心理学年報, 57, 309-328.
- 小山亘 (2008). 『記号の系譜—社会記号論系言語人類学の射程』 三元社
- 小山亘 (2011). 『近代言語イデオロギー論—記号の地政とメタ・コミュニケーションの社会史』 三元社
- 土井隆義 (2008). 『友だち地獄』 ちくま新書
- 西谷健次 (2017). 「皮肉発話の理解と对人的傷つきやすさの関連について—他者の傷つきへの共

- 感性と自己の傷つきへの敏感性に注目して」作大論集, 7, 55-65.
- 信田さよ子 (2013). 『傷つく人、傷つける人』集英社
- ハーバート, クラウディア (勝田吉彰訳) (1999). 『心に傷をうけた人の心のケア—PTSD(心的外傷後ストレス症候群)を起こさないために』保健同人社
- 宮地尚子 (2013). 『トラウマ』岩波新書
- 吉田輝美 (2011). 「介護労働者が受ける利用者やその家族からの言葉による傷つきへの対処方法の研究—特別養護老人ホームの介護労働者が受ける言葉による傷つき克服のインタビュー調査より」人間関係学研究, 17(2), 29-42.
- 和田秀樹 (2004). 『自分のことを「傷つきやすい」と感じている人へ—「イヤなこと」が消える60の処方』全日出版

新型コロナウイルス感染症に関する記者会見に見られる厚生労働省の姿勢 ーコーパスに基づく批判的談話研究の試みー

張 碩

1. はじめに

1.1 研究背景

パンデミックとなった新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）は全世界に甚大な被害を及ぼしている。2021年5月12日現在、新型コロナの感染者は約1億6000万人、死亡者は330万人を超えている。日本国内では、感染者は66万人となり、死亡者は8,200人である。その中で、日本の感染状況の特徴としては、欧米と比べて死亡者が少数に留まっているが、感染経路が特定できないケースが多いという点が挙げられる。そして3段階（3波）の感染拡大がはっきりと見えてきたということである。

1.2 研究目的

公衆衛生に関する緊急事件が発生した場合、政府機関の記者会見は権威ある公式情報源として重要な役割を担うが、どこの国の政府であれ自国の政策が国民に肯定的に評価されることを期待して発話していると考えられる。その期待通りの効果を得るため、自らの政策の有用性や正当性を宣伝し、不利益なことを避けようとする推察される。本稿はその現状認識を元に、日本の医療政策を定め公衆衛生を向上させることを目指す日本の厚生労働省（以下、厚労省）が記者会見において、新型コロナに関する感染状況をどのように伝えているかを言語学的視点から分析し、その姿勢の検証を試みる。

2. 先行研究

2.1 新型コロナウイルス等有事談話研究

新型コロナ感染症に関する談話研究は主にメディアの報道研究と行政機関・政治家の談話分析に大別できる。その中で、メディアは他国の感染対策および制度中の欠点を前景化させたり、自国の感染状況を後景化させたりするような偏向報道がよく見られる(Abbas 2020, Awad 2020)。また、国民の協力を求め、国民の連帯感を喚起するために、政治家が戦争メタファー、一人称代名詞“we”などのポジティブ・ディスコースを多用することが観察できる(Lv・Li 2020, Chen 2020, Sultan 2020)。その一方、Olimat(2020)は、アメリカの元大統領であるトランプの演説を修辞学の観点から分析を行った。その結果、トランプは、新型コロナと中国を結び付ける「China Virus」と、中国の武術カンフー(kung fu)とインフルエンザ(flu)を組み合わせた「Kung Flu」などのように感染症を特定の国家・地域を感染症と結びつけて言及し、結果として侮辱的かつ差別的なイメージを生成することで、国民のナショナリズムを醸成し、アメリカの感染拡大の責任を中国に転嫁する意図が明らかになった。

3. 理論的枠組み：コーパスに基づく批判的談話研究

本研究では、コーパス言語学と批判的談話研究¹(critical discourse studies 以下 CDS)という、やや反対する 2 つの枠組みを組み合わせることを試みる。

コーパス言語学は言語学の 1 分野であり、大量の、実際に使用された書き言葉および話し言葉のテキストを収集してデジタル化し、特定のソフトウェアを利用することを通して、言語運用または言語事象を分析する方法論である。コーパスに基づいたアプローチの利点として、より正確で厳密な形で分析を行え(Berelson 1952, Lasswell 1949)、引用した素データの特徴がデータ全体の傾向をどの程度代表するのかといったことを数値指標で示しうる(Lasswell, 1949)などの特徴が挙げられる。

本研究が依拠するもう 1 つの理論的枠組みとは、批判的談話研究(critical discourse studies, 以下 CDS)である CDS は談話、つまり、口頭や書面による言語使用を「社会的実践」の 1 つの形態と見なし、談話を社会的実践と表現することによって、ある一定の談話事象とそれを取り囲むさまざまな状況、制度と社会的構造の間の弁証法的な関係とそれらに形を与えるものである(Fairclough & Wodak 1997, 神田 2018 : 08)。従来、質的研究が CDS の方法論の中核的な存在と言える。ただし、コーパス言語学を使用した最近の CDS は、興味深い新展開を含めて、猛烈な勢いで増加している。

4. 研究対象

本研究のデータは厚労省のホームページに掲載されている記者会見のテキストである。そのうち、本稿は厚労省の発言者である厚労相²が感染状況をどのように伝達するかを探究するため、全体的な感染状況を研究することなく、むしろ期間を限定してその比較を試みる。

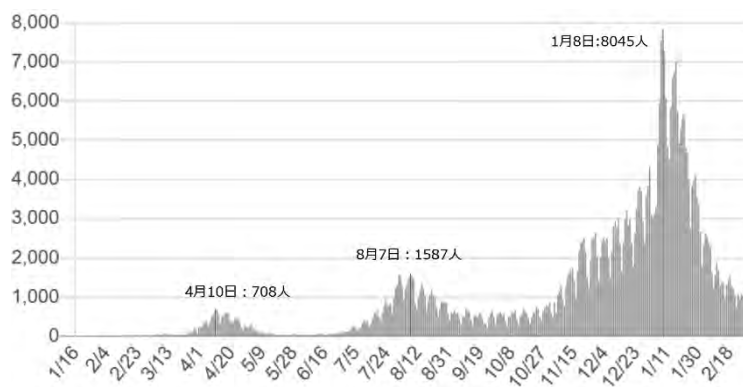


図 1 日本の感染者数（1 日ごとの発表数）

図 1 で示したように、日本の感染状況には主に 3 つのピークが見られる。

1 つ目は 2020 年 4 月 10 日（708 人）、2 つ目は 8 月 7 日（1587 人）であり、3 つ目は 2021 年 1 月 8 日（8045 人）である。それらの 3 つのピーク時期が第 1 波、第 2 波、第 3

¹ CDS は伝統的に CDA(critical discourse analysis)と呼ばれてきたが、CDA には「唯一の」方法などなく、多くの方法があるということになる。ゆえに、多くの学者は CDS という用語を用いることを推奨する (Van Dijk 2016)。

² 内閣改造に伴い、田村憲久厚生労働相は 2020 年 9 月 17 日、厚労省内で前任の加藤勝信官房長官から引き継ぎを受けた。本稿では大臣の個人差を問わない。

波とよく呼ばれているが、具体的な期間について、公式的な公文書あるいは事務連絡がなかった。本稿では、それぞれのピーク時期において新規感染者最多の日を中心点として、その前後2ヶ月間のデータを取り上げる。すなわち、2020年3月10日～同年5月10日、2020年7月7日～同年9月7日、2020年12月8日～2021年2月8日といった3つの時期、合わせて6か月のデータを収集し、比較研究を行う。また、もし当日、記者会見が行われていない場合、その日に最も近い日の記者会見を取る。その結果、本稿は以下の3つ期間のデータを対象とし量的分析を行う。

期間	回数	総抽出語数	総抽出語数（大臣のみ）
2020.03.10～2020.05.12	18回	61616	47399
2020.07.07～2020.09.08	14回	50101	41116
2020.12.08～2021.02.09	17回	57339	48285

5. 量的研究

本研究は量的研究と質的研究を両方に使用した。まず、量的研究について、本稿はテキスト分析を行う KH Coder を用いる。KH Coder とは、テキスト型データを統計的に分析するためのフリーソフトウェアであり、アンケートの自由記述・インタビュー記録・新聞記事など、さまざまな社会調査データを分析することができる。

上述のように、本稿は主に厚労省が新型コロナの感染状況をどのように伝達するかという問題の解明を目的とするため、「感染」をキーワードとしてそれぞれのコーパスで「感染」の共起語を検索した。表1に「感染」は3つのデータセットそれぞれ上位10番目までの共起語を示した。

表1 3つの期間コーパスにおける「感染」の共起語

2020.03.10～2020.05.12		2020.07.07～2020.09.08		2020.12.08～2021.02.09	
共起語	Jaccard ³ スコア	共起語	Jaccard スコア	共起語	Jaccard スコア
1 拡大	0.3644	1 思う	0.4748	1 対応	0.4000
2 思う	0.3289	2 対応	0.4685	2 思う	0.3904
3 状況	0.3254	3 状況	0.3964	3 拡大	0.3654
4 対応	0.3161	4 必要	0.3868	4 今	0.3571
5 必要	0.2792	5 新型コロナウイルス	0.3854	5 お願い	0.3500
6 新型コロナウイルス	0.2713	6 考える	0.3846	6 医療	0.3462
7 行う	0.2628	7 対策	0.3846	7 方々	0.3443
8 場合	0.2569	8 申し上げる	0.3818	8 状況	0.3361
9 医療	0.2290	9 行う	0.3491	9 我々	0.3279
10 今	0.2222	10 医療	0.3469	10 いろいろ	0.2969

³ Jaccard 係数は、「Jaccard index」や「Jaccard similarity coefficient」と呼ばれる。Jaccard 係数は2つの集合に含まれている要素のうち共通要素が占める割合を表しており、係数は0から1の間の値となることからわかる。Jaccard 係数が大きいほど2つの集合の類似度は高い(よく似ている)といえる。

表1の中で、まず「拡大」という言葉に注目する。2番目のデータセットには「拡大」という感染状況の変化を反映する共起語が含まれないことが観察できる。この現象を詳しく調査するため、「感染」「拡大」といった単語のコンテキストをさらなる分析することが有意義だと考えられる。

KH coderで「文書検索」というコマンドを用いると、「特定の語を含むこと」といった



条件をはじめとして、さまざまな条件を指定して特定語の文脈を検索できる。図1は「文書検索」を使用し、「感染」and「拡大」のコンテキストを示した1例である。

図1では、「感染」と「拡大」を含む文書を表示した。具体的な内容を確認する際に、その内容をダブルクリックすると、そのコンテキストを読むことができる。

図1 「感染」and「拡大」を含む文書

この調査方法を踏まえ、3つのデータセットで検索すると、記者の発言を除き⁴、「感染」と「拡大」を共起するテキストがそれぞれ43、29、50検出された。

ただし、感染状況を伝達する際に、必ず「拡大」という単語が使用されるわけではなく、「拡大」と似通った単語、例えば「増える」、「増加」、「多い」あるいは対義語の「減少」、「減る」、「少ない」などが用いられる可能性も高い。そのため、本稿はそれらの単語を加え、「感染」との共起テキストを調べた。その結果、感染状況と関連するテキストがそれぞれ24、19、38検出された。

新型コロナの感染者数から見れば、3つ目の期間>2つ目の期間>1つ目の期間という順であるが、量的分析を通して、感染状況を含むテキストが、データ3(88)>データ1

(67)>データ2(48)という順番になることが観察できた。その要因を探るため、それらの単語をコンテキストから詳しく分析する必要があると考えられる。

個々のコンテキストを詳細に確認すると、「感染」と「拡大」または「増加(増える/増やす/急増/激増多い/拡がり)」、「減少(少ない/収束/収まる/減る)」のテキストが下の表3のように、主に4つのカテゴリーに分けられることがわかった。

全体的に見ると、「感染」と拡大を含むテキストが表2が示しているように、主に「現状」、「仮定」、「防止」、「知見」といった4つカテゴリーに分類できる。(カッコ内はテキストの出現回数である)。

⁴ 本稿は新型コロナの感染状況について、厚労省がどのように把握したり発信したりしているかを解明するため、量的研究の部分では、厚労大臣の伝え方を重点に置き、記者の発言に対する研究を割愛する。

その中で、感染の「現状」について、感染が日本国内で拡大していることを多く言及しているのがデータ 3>データ 1>データ 2 という順番であることが明らかになった。その一方、感染拡大の「防止」が含まれるテキストが、データ 2>データ 1>データ 3 という順となっている。つまり、3つのデータの中で、データ 2 は感染拡大の情報を少なく取り上げると同時に、感染拡大防止の対策を数多く述べていることが解明した。

6. 質的分析

本章では、新型コロナの感染状況に関する厚労省の記者会見を質的側面から分析し、伝達される厚労省の姿勢を明らかにするのが目的である。また、本章で扱われた 6 つのデータは、感染が徐々に拡大した過程、及びピークに達した後に減少していった過程を取り上げている。

6.1 2020.03.10~2020.05.12 におけるディスコース

2020.03.10~2020.05.12 という期間において、日本国内は感染初期から急速な蔓延、緊急事態宣言の発令、そして国内の 1 日の感染者数が 100 人を下回っていた。

表 2 感染 and 拡大のコンテクス

	Dataset1	dataset2	dataset3
現状	感染が拡大していない(日本) (3) 感染が拡大している(日本) (20) 感染が拡大している(海外) (5) 感染者が減少している(日本) (4)	感染が拡大していない(日本) (7) 感染者が減少している(日本) (4)	(変異した新型コロナウイルス感染症は)感染が拡大していない(日本) (1) 感染が拡大している(日本) (35) 感染が拡大している(海外) (2) 感染者が減少している(日本) (9)
仮定	感染が拡大すれば/場合、〇〇対応を行う(15)	感染が拡大すれば/場合、〇〇対応を行う(12)	感染が拡大すれば/場合、〇〇対応を行う(24)
防止	感染拡大防止するため、〇〇対策を行う(18)	感染拡大防止するため、〇〇対策を行う(24)	感染拡大防止するため、〇〇対策を行う(11)
知見	〇〇行為が感染拡大を引き起こしているリスクが高い(2)	〇〇の症状がなくても感染が拡大するリスクがある(1)	〇〇行為が感染拡大を引き起こしているリスクが高い(6)

本節は、その期間における記者会見を取り上げ、感染者が増えているあるいは感染が拡大している時、厚労省が感染状況をどのように伝えているかを考察する。抜粋の下線は全て筆者が付けしたものである(以下同様)。

<1-a>

大臣：今回の宣言の中で、やはり今が大変大事な時期である、まさにこれから感染の爆発的な拡大につながるかどうか、こういう正念場にあるという認識であります。国民の皆さん方には、外出の自粛、なかならず密閉、密集、密接、この「三密」、これを避けていただくように引き続きお願いをしたいと思います。(2020 年 4 月 10 日)

<1-b>

大臣：4 月 7 日に緊急事態が発出された以降ですから、7 日から 13 日間でありますけれども、東京都を見ても、7 都府県で見ても、全国で見ても、患者の数はおよそ倍増している状況であります。特に、この間の全国の増加分のうち 7 都府県の合計が 73% を占めるということで、7 都府県で主として増加している状況は確認できるというふうに思います。(2020 年 4 月 14 日)

抜粋1は4月10日と4月14日の記者会見における大臣の発言である。

まず、<1-a>の前に、記者が緊急事態宣言が発令された初めの段階において、新規感染者が増え続けている状況に対して厚労省の見解を聞いており、<1-a>の大臣の発話はその返答である。大臣は感染の爆発的な拡大を防ぐために、外出自粛や3密の回避を呼び掛けている。1文目の「これから感染の爆発的な拡大につながるかどうか」において、彼は形容動詞「爆発的な」の使用により、「感染が拡大している」という前提を認めていることがわかる。また、大臣が「大変大事な時期」、「正念場」などの「例外状態(state of exception) (Agamben 2005)」を表す言葉の使用が見られる。Fairclough & Fairclough(2012)は、政界のエリートが自らの、非常時に例外的な措置を実施すべきという主張に支えられ、平常時には政治的にも社会的にも受け入れられないような政策を正当化させるため、現在は「例外状態」であることを指摘している。大臣が自粛という対策の重要性や正当性を伝達するため、緊急事態における国民の警戒性や一体感を醸成したり、市民の意識を喚起させたりする様子が観察できた。

<1-b>は、記者の質疑「7都府県に緊急事態宣言が発令されて今日で1週間になります。依然増加傾向にある全国の感染者を厚労省としてどう評価しているのか」への回答である。大臣は「13日間で」、「73%」という具体的な数字を踏まえ、「全国で見ても」、「倍增」、「特に(…)7都府県で主として増加している」と語り、<1-a>と同じく、日本国内の感染状況や厳しさを明瞭に伝えている。

つまり、1つ目の時期では、国民に自粛の協力を求めるため、大臣が感染状況の厳しさをはっきり伝えたり、人々に危機感を喚起させたりする様子が解明された。

6.2 2020.07.07~2020.09.08におけるディスコース

東京都では4月17日に206人の感染確認をピークに、緊急事態宣言が発令されてから徐々に新規陽性者が減り続け、5月23日には新規陽性者が2人まで減少した。それゆえ、東京をはじめ、日本全国では感染拡大の抑え込みに成功したかに見えた。しかし、その後、新規陽性者が再び増加し続け、7月に入ってから連日100人以上の感染者が確認され、感染の再拡大が確認されていた。

以下の2つの抜粋は2020.07.07~2020.09.08の期間における記者会見の具体例である。

<2-a>

大臣：東京都からはそうした新規陽性者数の動きに加えて、4月17日時点と比べると、前回は高齢者の方が多かったことに対して、今回は8割以上が30代以下の若い方であるということ、それから感染のルートが分かっている比率も前回に比べて高いということ、また、クラブなどの接待を伴う飲食店などの感染が確認された店舗において、積極的に検査を受けていただいた結果によるものが一定数含まれているということ等の指摘がありました。(2020年7月10日)

<2-a>は、記者が感染再燃の現状を踏まえ、大臣の見解や対応を問った返答である。まず、大臣は「今回は8割以上が30代以下の若い方」と言い、感染者の年齢層を強調している。また、その後の「感染のルートが分かっている比率も前回に比べて高い」において、4月17日と比較すると、現状がそれほど厳しくないことを暗黙的に伝えている。しかし、「東京都新型コロナウイルス感染症対策サイト」が公開されたデータによると、7月9日

の感染経路が特定できる割合が 54%であり、4 月 17 日の 33%より高いが、感染経路が特定できない陽性者が 5 割を占め、依然として高いと言えよう⁵。すなわち、厚労省が自らにとって都合により 1 面的な解釈に誘導し、5 割の感染経路が特定できないという不都合の側面に触れていないとわかった。

次の文では、大臣がクラブを挙げながら接待を伴う飲食店に対する検査と感染数の増加との関係性を述べるが、7 月 9 日の東京都新型コロナウイルス感染症モニタリング会議資料には、「その感染経路は接待を伴う飲食店等だけでなく、同居、職場、会食等、多岐に渡っている。今後は同居、会食等を介した高齢者層への感染拡大にも注意が必要。」という専門家の提言が掲載されていた。ここでは、「接客を伴う飲食店」のみを強く目立たせ、接客を伴う飲食店へ行かなければ、感染のリスクが低くなるという解釈に導き、同居、職場など避けにくい場所の感染リスクを後景化させると考えられる。

<2-b>

記者：東京以外のところも感染が増えている状況ですけれども、その中でも他のところは継続することについてはどうなのでしょう。

大臣：昨日、分科会においても議論されて、一方でこうした対応をしていくということに伴って、感染拡大防止を図りながら経済活動を上げていく、ここをどう進めていくのか、また提言がなされたと承知しております。（2020 年 7 月 17 日）

7 月 16 日、日本政府は「Go To キャンペーン」の対象から東京都への訪問を目的とする旅行および東京に住んでいる人の都の外への旅行を対象から外す方針を公表した。また、当日に日本全国 31 の自治体と空港検疫の 4 人を合わせて 624 人の感染が発表され、1 日の感染者が 600 人を超えたのは 4 月 10 日以来である。その背景を踏まえ、翌日の記者会見において、記者が抜粋<2-b>で、感染が拡大している東京以外の地域でも、「Go To キャンペーン」を中止するかどうかを質疑している。

その答えの中で、記者の質問「他のところは継続することについてはどうなのでしょう」について、分科会での議論が取り上げられる。「一方でこうした対応をしていくということに伴って、感染拡大防止を図りながら経済活動を上げていく」において、「こうした対応」が東京以外の地区でも「Go To キャンペーン」が続くことを指すが、「に伴って」の使用により、「一方でこうした対応をしていくということ」という文が従属節になる。したがって、質問の焦点は「Go To キャンペーン」の継続から、「感染拡大防止を図りながら経済活動を上げていく」という対応策にすり替えされることが明らかにする。その後、謙譲語「承知しております」が用いられ、それらの対応策は厚労省の意見ではなく、専門家たちの見解であると明示する。

次に、「感染拡大防止」という「感染拡大（の）防止」という名詞化された複合語を注意すべきである。名詞化は、時制、とモダリティの両方で、節のある意味論的な要素の「喪失」を伴う（フェアクラフ 2003：216）。「感染拡大（の）防止」の使用により、動詞の時制、すなわち、感染拡大という状況は発生しているかあるいは抑制されているかと

⁵数多くの国が感染経路不明の症例数を公表しないため、参考として、韓国の厚労省のデータによると、7 月 6 日、韓国の感染経路不明な患者数が 10.7%である。

いう現状が不明になった。なお、日本語のコーパス（BCCWJ 版『梵天』）で、「～（の）防止」を検索してみると、「児童虐待の防止」、「労働災害防止」という形での使用例が多い。すなわち、「望ましくないこと＋（の）防止」という用法である。そして、この望ましくないことが以前に発生したことがある、または発生が懸念されるため、再発を防ぐように表す構文である。そのため、ここで、「～防止」の使用を通し、現在の感染状況を後景化させ、政府の対策を目立たせる。すなわち、全国の感染拡大している状況から感染拡大防止と経済活動回復の両立という対応策に転向させる効果が期待できると主張している。

6.3 2020.12.08～2021.02.09 におけるディスコース

厚労省の統計によると、国内の新型コロナの患者数は10月に一旦減少したものの、11月から増加に転じていった。そして12月に入り、爆発的な感染拡大により、医療提供体制が機能不全に陥るおそれがあるとされている医療提供体制がひっ迫し、機能不全に陥る地域が現れた。その状況を踏まえ、政府が1月7日、13日に2回目の緊急事態宣言を発令し、飲食店などに対する「営業時間の短縮」をはじめ、特に20時以降の不要不急の外出自粛を要請する。緊急事態宣言の発令により、感染者が大きく減少したことから、政府は3月21日をもって、緊急事態宣言を2カ月半で全面解除した。本節で、筆者が2つの具体例をあげながら、この爆発的な感染拡大の期間において、厚労省が感染状況をどのように伝えたかを解明する。

<3-a>

大臣：（前略）各自治体といいますか医療機関また民間の関係者の方々にご理解・ご協力をいただいて、とにかくこういう感染拡大局面でございますので、何とかそれぞれの皆様方のお力をお借りして、総力を挙げてこの感染拡大期の医療の対応というものを、これを進めてまいりたいと思っております。（2020年12月11日）

感染拡大により、医療体制がひっ迫する状況が現れていることから、12月11日の記者会見では、記者が医療人材の不足という問題点について、政府の対応策を求めており、抜粋<3-a>はその返答である。彼はその前の発言では、いくつかの具体的な対策、例えば、「看護師の皆様方の一番必要な業務に特化していく、マンパワーを回すというようなやり方もある」と述べた。

そして、医療機関と医療従事者の協力を求める際に、「感染拡大局面」、「感染拡大期」といった単語で現在の感染状況をはっきり伝えながら、「お力をお借りして」、「総力を挙げて」と語ることによって、政府あるいは厚労省の司令塔が役割を果たしていることを表しつつ、1つ目の期間での発言と同じく、国民の一体感を醸成する機能が見込める発話を用いていることが明らかになった。

ここでは、「感染拡大期」という名詞化された単語に注目したい。「拡大期」という表現は、感染の拡大が自発的に、社会的・文化的な規則に沿って発生したような解釈を前景化させ、感染状況の厳しさを伝達しているものの、政府の責任や対策上の不備は一切想起させない表現となっている。

<3-b>

大臣：まず、12月16日のアドバイザリーボードですが、いろいろと評価、分析いただいております。やはり高止まりした後は増加傾向ということで、史上最多の水準が続いております。1週間の移動平均を見ましても、やはり先週と比べてこの週末であります、120～130人増えているという状況であります。（中略）死亡者も増加しておりますが、更に重症者が増えてきているということは、あつてはならないことですが死亡者が増加する可能性もあるということで、必要な対応をとらなければならないと思っております。これから更に感染拡大した場合には、酒類を提供する飲食店などの時短要請の範囲を更に強化するということも含めて検討が必要だと、アドバイザリーボード等で指摘をいただいております。新年会、忘年会それから帰省等がこれから予想される時期になってきますが、そういうものに対しても静かな年末年始を迎えていただくために、感染を広げないために、それぞれの対応をお願いしたいということです。（2020年12月21日）

抜粋<3-b>の前で、記者が「東京都の感染者が過去最多の556人であり、国内累計で約20万人となった」という感染状況を挙げ、感染状況の受け止めと感染予防対策について、大臣の考えを問いただしていた。抜粋<3-b>はその返答である。大臣が現在の感染状況が「史上最多の水準」で、「120～130人増えているという状況」であると述べている。次に、彼が死亡者と重症者の増加を取り上げた後、義務的モダリティ「なければならない」を用い、政府が感染動向を重要視していることを表象している。それに続き、大臣が「酒類を提供する飲食店などの時短要請の範囲を更に強化する」という措置を行う可能性があると言語時、「アドバイザリーボード」と「指摘をいただいて」という専門家の「声」を引用することで、専門家の権威を利用し今後の政府対応策に反映させ、その権力に更なる威力を与える効果があると言えるだろう。

その後、大臣は静かな年末年始を過ごすようと呼びかける際に、「家族、いつもの仲間以外の人と会食しない」、「多人数会食しない」、「帰省は慎重に検討する」という私権を制限する要請を具体的には述べず、形容詞の「静かな」を使用することを通して、行動を「制限」とするというネガティブなイメージを避け、政策への不快感を軽減させる効果があると考えられる。そして、「静かな年末年始を迎えていただく」ことは、目的を表す従属節「～ため」に埋め込まれているので、前提として提示されている。その後の「それぞれの対応をお願いしたいということです」を合わせると、この対策そのものの妥当性については議論する土俵から降ろし、対策を既定の事実として伝えている。

7. まとめ

本稿は3つの感染ピークの時期における厚労省の記者会見を取り上げ、厚労省が新型コロナウイルス感染症の感染状況をどのように伝達しているかを明らかにすることを目的とし、量と質の分析を行った。

その結果、量的分析を通し、感染状況の変化について伝えた量的総数は、データセット3>1>2と解明した。また、質的分析を通し、以下の結果を明らかにした。

①1つ目の期間において、大臣が自粛の重要性や正当性をアピールするため、「正念場」、「大変大事」、そして具体的な数字を用い、感染状況の国民の警戒性や一体感を醸成したり、市民意識を喚起させたりする様子が観察できた。

- ②2 つ目の期間において、感染者数の増加に対して、大臣が政府にとって都合が悪いできごとを後景化し、都合がよいできごとに焦点を当てて語ることで、新規感染者の数より、重症者の比率と経済の回復を重要視する正当性を提示した。
- ③3 つ目の期間において、厚労省が感染拡大の状況を多く取り上げ、国民の危機感を喚起すると同時に、政府の責任や対応策の不備などには一切言及せず、感染拡大が不可避な事件として描き出した。

紙幅の都合により、本稿で取り上げた具体例が少なく、感染が増加する現状が問われた時の大臣の返答の分析のみに留まり、そこで把握した厚労省の意図や姿勢を分析するにはさまざまな限界があった。今後は、データの量を増加しながら、厚労省の姿勢を全面的に研究する必要があると考える。

主要参考文献

- Abbas, A. H. (2020) Politicizing the pandemic: A schemata analysis of Covid-19 news in two selected newspapers. *International Journal for the Semiotics of Law-Revue Internationale de Sémiotique Juridique*, July (3), 1-20.
- Agamben G.(2005) *State of Exception*, translated by Kevin Attell, Chicago: The University of Chicago Press
- Awad, M.(2020) COVID 19-The Foreign Virus: Media Bias, Ideology and Dominance in Chinese and American Newspaper Articles January. *2020International Journal of Applied Linguistics & English Literature* 9 (1):56
- Berelson, B. (1952) *Content Analysis in Communication Research*. Glencoe, IL: Free Press
- Fairclough, N. (2003) *Analysing Discourse : Textual Analysis for Social Research*. London: Routledge. (日本メディア英語学会メディア英語談話分析研究分科会訳、『ディスコースを分析する—社会研究のためのテキスト分析—』くろしお出版)
- Fairclough, I. & Fairclough, N. (2012) *Political Discourse Analysis: A Method for Advanced Students*. Routledge
- Lasswell, H. D. et al. (1949) *Language of Politics: Studies in Quantitative Semantics*. New York: George Stewart
- Olimat, S. N. (2020) COVID-19 pandemic: Euphemism and dysphemism in Jordanian Arabic. *GEMA Online® Journal of Language Studies*. 20(3), 268-290.
- Jinshuang, L. & Rong, L. (2020) A positive discourse analysis of diplomatic speech of President Xi in Covid-19. *IETI Transactions on Social Sciences and Humanities*, 8.
- Reisigl, M. & Wodak, R. (2016) Critical Discourse studies: history, agenda, theory and methodology (DHA), *Method of Critical Discourse Studies* (3rd Edition), London: SAGE. (神田靖子訳, 2018, 「批判的談話研究：歴史、課題、理論、方法論」『批判的談話研究とは何か』三元社, 1-30)
- Reisigl, M. & Wodak, R. (2016) Checks and balances: how corpus linguistics can contribute to CDA, *Method of Critical Discourse Studies* (3rd Edition), London: SAGE. (梅咲敦子訳, 2018, 「抑制と均衡：コーパス言語学がいかに貢献できるか」『批判的談話研究とは何か』三元社, 227-261)
- Sultan, S. & Rapi, M. (2020) Positive Discourse Analysis of the Indonesian Government Spokesperson's Discursive Strategies during the Covid-19 Pandemic, *Gema Online Journal of Language Studies* 20 (4):251-272
- 樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版
- 韓国保健福祉部 (http://ncov.mohw.go.kr/tcmBoardView.do?brdId=&brdId=&brdGubun=&dataGubun=&ncvContSeq=355297&contSeq=355297&board_id=&gubun=ALL#最終閲覧日 2021 年 3 月 24 日)
- 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) (https://bonten.ninjal.ac.jp/bccwj/string_search 最終閲覧日 2021 年 3 月 24 日)
- 厚生労働省大臣記者会見(<https://www.mhlw.go.jp/stf/kaiken/index.html> 最終閲覧日 2021 年 5 月 12 日)
- 東京都防災ホームページ「(第 1 回) 東京都新型コロナウイルス感染症モニタリング会議資料 (令和 2 年 7 月 9 日)」(<https://www.bousai.metro.tokyo.lg.jp/taisaku/saigai/1009676/1009728.html> 最終閲覧日 2021 年 3 月 24 日)

日韓問題と共存する女性たちのアイデンティティ —韓国での不買運動に関する語りの分析を通して—

竹村 博恵

1. はじめに

現在韓国には、居住ビザ・永住ビザ・結婚移民ビザ¹を使用して滞在している結婚移民といわれる女性たちが 214,658 名存在している。そのうちの 13,080 名が日本人女性であり、中国人、ベトナム人について 3 番目に滞在人数が多い結婚移民女性集団となっている（韓国法務部 2020a, b）。韓国人男性と日本人女性の国際結婚の動機には大きく分けて、内鮮結婚型²、宗教結婚型³、恋愛結婚型の 3 種類が存在するが（Kim, Seog-Ran 2007⁴）、日韓両国で行われている彼女たちに関する先行研究の大半は内鮮結婚型と宗教結婚型の日本人女性を対象としたものであり、近年増加傾向にある恋愛結婚型の日本人女性に関する研究の必要性が指摘されている（Park, Esther 2017）。そこで本稿では、韓国人男性と恋愛結婚し韓国に移住して日韓にルーツを持つ子供を育てている日本人女性を「在韓日本人女性」として位置付け、既存の在韓日本人女性に関する研究ではあまり注目されてこなかった彼女たちを研究対象として取り上げる。

恋愛結婚をした在韓日本人女性に関する先行研究のほとんどは韓国で実施されたものであり、彼女たちの韓国社会への適応や文化受容態度（Yim, Young-Eon et al. 2013, Kubo 2015）、養育上の葛藤（Park, Esther 2017）、アイデンティティ構築に関するもの（Ishii et al. 2015）などが見受けられる。それらの先行研究では、日常生活に介入してくる日韓問題の影響⁵が、個人的な対処が難しい在韓の日本人女性独特の問題として指摘されているものの、度重なる母国への批判にさらされる彼女たちに対する憂慮やそれに関する間接的な言及にとどまっている。その為、日韓国際結婚家族の構成員であり日韓ダブルの子を持つ母親でもある彼女たちが、日々の生活の中で日韓問題に起因する出来事をどのように認識し、どのようにそれらと関わり合っているのか、またその中でどのような課題を抱えているのかに関する詳細な調査が不足している現状にある。

そのような状況に鑑み、本稿では在韓日本人女性へのインタビュー調査の中に現れた日本製品不買運動⁶に関する語りを分析対象として定め、1)彼女たちが、その当時自分を取りまく社会的世界をどのように認識していたのか、その中でどのように自らを位置付け、目の前の状況と交渉

¹ 韓国では、2010 年以降、在留外国人の中で居住ビザ（F-2-1）、永住ビザ（F-5-2）、結婚移民ビザ（F-6-1, 2, 3）を所持している者を結婚移民として承認している（韓国法務部 2020b）。

² 韓国併合以降、第二次世界大戦後に朝鮮が独立するまでの 35 年間に日本人と朝鮮人との間で結びばれた結婚を「内鮮結婚」あるいは「内鮮通婚」と呼んでいた（竹下 2000:54）。本稿では竹下の用語を引用し、この型に分類されるものを内鮮結婚型とした。

³ 韓国社会では、統一教会を介した宗教結婚によって日本人女性が韓国に嫁いできていることはよく知られている。近年、恋愛結婚で韓国人男性と結婚する日本人女性の数も増加傾向にあるが、少し前までは日韓の国際結婚といえば宗教結婚という認識が一般的であった（中西 2014:68）。

⁴ 本稿で引用した韓国語の文献は、題目の理解や検索のしやすさを考慮し論文内に記載されていた英語の著者名と英語題目を使用して表記した。参考文献への記載には、英語文献と区別するために末尾に韓国語文献である旨を提示している。

⁵ 筆者が 2019 年 8 月・9 月に韓国で実施したインタビュー調査（14 組：計 28 名）の中でも、竹島はどちらの国のものだと思うか質問される、子供が保育園に入園するとはじまる歴史教育・領土教育への憂慮、母親が日本人だということでいじめにあった、日本語を話すなど怒られたなど、様々な日韓問題に起因する出来事との遭遇が話されていた。

⁶ 2019 年夏に日本政府が発表した韓国への一部半導体関連製品の輸出管理強化措置を受け韓国で始まったものを指す。過去に起こったものとは異なり、今回の不買運動は韓国社会全体に普及し、学校や公共交通機関、スーパーなどでも不買運動を促す垂れ幕やポスターなどを目にするような状況になった。

していたのか、2)不買運動を媒介とした他者（性）⁷との関わり合いの中で実践される彼女たちのアイデンティティとはどのようなものか、という2つのリサーチ・クエスチョンを設定する。そして、それらを検証することを通して、揺れ動く日韓関係の狭間で日韓問題の影響と共存せざるをえないという状況下で生活している彼女たちの実態を明らかにすることを目的とする。また、その結果をもとに、日韓問題や日韓関係の悪化が不定期に勃発する中で危うい立場に晒されやすい彼女たちが、自力での改善やコントロールが困難な問題に振り回されることなく少しでもよりよく生きていくことができるような社会的・心理的支援の開発への示唆の発見を目指す。

2. 理論的枠組み

本稿においては、「アイデンティティ」・「インタビューのなかで行われる自分自身に関する語り」・「枠組み」に関し、バトラーの思想を理論的枠組みとして概念化を行った。また、インタビューの中に現れる語りとそれを取り巻く相互行為を分析する際の理論的枠組みとしては、スモール・ストーリー、ポジショニング分析を採用した。以下でそれぞれについて簡略に述べる。

2.1 J. バトラーの思想（「アイデンティティ」・「自分自身に関する語り」・「枠組み」）

バトラーは、アイデンティティを、その中に自己を見出すための前提とされるカテゴリーではなく、現在進行中の言説実践として介入や意味づけ直しに向かって開かれている「意味づけの実践」として定義する（バトラー 1999:73, 254）。また、そのような実践は「身体（常に他者にさらされている存在であり、わたしたちがさまざまな観点に出会う場）」（バトラー 2012:72）を介して生じる他者（性）との関わり合いの中で行われるとする。そして、そのような実践が行われるプロセスは、「私（アイデンティティの実践を担う身体）」が、他者からの呼びかけ⁸に回答して行う語り（自分自身についての説明）と、それを取り巻く相互行為の中において観察されうると述べている（バトラー 2008:23-24, 35-37, 207-209）。なぜならそこには、呼びかけに応じた語り手が一旦自分の立ち位置を引き受けたのち、自分を取り巻く他者（性）との関わり合いの中で自身の立ち位置を再調整し、その新たな位置を足がかりにして他者（性）との関係性を再構築していく過程、つまり「私」が他者との関わり合いの中で行うアイデンティティの実践が現れているからである。また、バトラーは『戦争の枠組み』の中で、人は他者や自分ではコントロールできない状況に直面すると身体の応答性⁹が活性化され暗黙のうちに特定の解釈行為を確立してしまうと述べ、その解釈の中には自身を侵害し影響を与える他者（性）を身体がどのように認識し、それらに対しどのようにネゴシエイトしていくかを決定する枠組みが現れると指摘している（2012:48-49）。本稿ではこれらのバトラーの思想を理論的枠組みとし、アイデンティティを「関わり合いの中で行われる意味づけの実践」、インタビューの中に現れる彼女たちの語りを「呼びかけに応じて開始される自分自身の説明」として定義する。また、不買運動に関連した語りや、相互行為の場においてなされる彼女たちの発言を分析する際には、バトラーの「枠組み」の概念を使用し、彼女たちが出来事との遭遇を通じてどのような情動を抱き、そこからどのような解釈の

⁷ バトラーのいう他者性とは、物理的な人間という存在としての他者だけでなく、個人が身を置く生活環境、そのなかに存在する社会的規範、認識の枠組みなどを包括した社会的世界をも含んだ概念である（バトラー2012:48-49、藤高 2020:7-8）。

⁸ バトラーは、人は「呼びかけ」に対し必ず回答するのではなく、それに回答するかしないかを自分で選択し、時には「呼びかけ」られていなくても振り向いてしまうことがあると述べ、このような「呼びかけ」という言語行為の失敗の中に人の行為体（agency）としての可能性が認められるとしている（大貫 2007）。

⁹ バトラーのいう「応答性」とは、直面している状況に対する反応であり、そこには喜び、憤怒、くらしみ、希望などの幅広い情動が含まれる。また、それらは観念作用や批評の基礎であり要素でもある（バトラー 2012）。

枠組みが確立され、どのように状況を認識し交渉していくのかについても考察を行う。

2.2 スモール・ストーリー

スモール・ストーリー・リサーチでは、語り手は「自己を行う」(イェルガコポロ 2013:26) ためだけにストーリーを語るのではなく、それが披露された相互行為の場において何かを成そうとする談話上の関与をも同時に行っているという観点に立つ。そして、ストーリーの内容とそれを取り巻く相互行為の両方を等しく分析対象とする。さらに、それら 2 項目への分析を通して、語り手が相互行為の場においてストーリーを語る中で実践しているアイデンティティを明らかにすることを目指す(イェルガコポロ 2013)。また、ストーリーの中に提示される局所的なアイデンティティへの習慣的な関与は、私たちが何者であるかという連続する意識の基盤を構築することへと繋がっていくと考える(Bamberg & Georgakopoulou 2008, イェルガコポロ 2013)。スモール・ストーリーの具体的な例としては、インタビューの中に現れる現在進行中の出来事や、未来や仮定の出来事に関する語り、ほのめかし、語りを据え置くこと、語ることを拒否することなど、短い内容のものが挙げられる(秦 2013)。

2.3 ポジショニング分析

Bamberg (1997, 2004) が提唱したポジショニング分析は、会話という相互行為の中に現れるナラティブの中で、語り手が「自己を“行う (do)” 方法」(イェルガコポロ 2013:19) を発見するための手法として多くの研究者に採用されてきた。ポジションとは、前提とされるものとして語り手が所有しているものではなく、ナラティブが相互行為の場において伝達される過程のなかで出現するものである(1997:333)。Bamberg は分析のための 3 つレベルを提示しており、一つ目は、語られる世界に描かれる他の登場人物との関わり合いの中で示される自己(レベル 1)、二つ目は、語りの世界において他の参与者との関わり合いの中で示される自己(レベル 2)、三つ目は、レベル 1・2 の自己の提示を通して創造される包括的な社会文化的自己(レベル 3)である。本稿では、インタビューの中に現れる語りとそれを取り巻く相互行為の場の両方を分析対象とし、語られる世界・語りの世界において語り手が他者との関わり合いの中でどのように自らを位置付けるのかを明らかにする。そして、それを通じて、二つの世界において立ち現れるポジションのもとで、語り手が実践するより包括的な社会文化的自己(アイデンティティ)がどのようなものかを捉える。

3. データ

本稿で使用するデータは、2019 年 8・9 月に韓国で実施したインタビュー調査の一部である。インタビュー参与者 3 名(インタビューー 2 名、インタビュアー 1 名)は全員が在韓日本人女性であり、日韓にルーツを持つ子供を韓国で育てる母親でもある。インタビューーであるユキ(仮名)とナオ(仮名)は在韓日本人の母親で構成された集まりで知り合った友人同士であり、年齢はともに 30 代前半、インタビュー実施時の在韓歴はユキが 8 年、ナオが 2 年であった。ユキの職業は日本語講師であり、ナオは専業主婦である。インタビュアーである調査者は 30 代後半であり、インタビュー実施時の在韓歴は 7 年、日本の大学院に在籍する学生であった。インタビュー実施時、韓国での永住権を取得している者はいなかった。3 人は調査者の友人を介して知り合い、インタビュー実施時は初対面であった。インタビューはユキとナオの共通の友人宅で実施され、ボイスレコーダーによる録音と 2 台のビデオカメラによる録画を同時に行った。

4. 分析

本稿では、データ 1 に現れたユキとナオのスモール・ストーリー、データ 2 に現れたユキのスモール・ストーリー、そしてそれらを取り巻く他の参加者の会話を中心に分析を行っていく。

4.1 データ 1: 「日本人であることを出せない」

- | | |
|--|---|
| 1. ユキ : (2)日本...人っていうのを前にあんまり出せない | 25. ユキ : うん |
| 2. : [(.)状況って言うんですか] | 26. ナオ : [そうするとちょっと(ユキを見て)ねえ?] |
| 3. ナオ : うんうんうん | 27. ユキ : うん |
| 4. 調査者: ああ↑:: | 28. ナオ : [いっいつらいです] |
| 5. ユキ : 例えば子供と喋っ(.)今は[子供いますけど(ナオを見る)] | 29. ユキ : [日本語って思ってるのか外国語って思ってるのか] |
| 6. ナオ : [ああわかりますそれ(ユキを見る)] | 30. : [わかんない]けれど↑も |
| 7. ユキ : 電車乗ってて[::こんなしたらあかんよとか] | 31. 調査者: うんうん |
| 8. ナオ : [↑わかりますそれ-↑] | 32. ナオ : [うん] |
| 9. : うん[うん] | 33. ユキ : (..)受ける側としたらそういう印象 |
| 10. ユキ : [ねっ(..)喋る(.)かける言葉が↑::ああ日本語?] | 34. 調査者: う↑ん::[::] |
| 11. : [(.)っていう] | 35. ナオ : うんうん |
| 12. ナオ : [うんうん(ユキを見る)] | 36. ユキ : [今↑は: (2)それがこう(..)ちょっと] |
| 13. ユキ : っていうその周りの視線 | 37. : [1 何年か前とかって比べると] |
| 14. ナオ : 思います | 38. 調査者: [1 なるほど] |
| 15. 調査者: [ふ::ん] | 39. ナオ : [2 うん:::] |
| 16. ナオ : [電車とか(.)たっ[(.)バスとか乗ってて↑:] | 40. ユキ : [2 あっ日本人っていう感じじゃない <u>感じじゃないかなって</u>] |
| 17. ユキ : [うん] | 41. : >被害妄想かもしれないへんけ↑ど<(1)思っちゃう] |
| 18. ナオ : やっぱり自↑分::[は日本語で話したいので::] | 42. 調査者: う::[::ん] |
| 19. ユキ : [うん] | 43. ユキ : [うん(..)ていう面は住みにくい(..)ねえ?] |
| 20. 調査者: うんうん↑:: | 44. : (ナオの方を見てうなずく) |
| 21. ナオ : [話すとやっぱり(.) <u>向く人</u> は向きますよね] | 45. ナオ : うん(ユキに見られてうなずく) |
| 22. ユキ : [うん] | 46. ユキ : うん |
| 23. : うん | 47. 調査者: ああなるほど |
| 24. ナオ : 日本語で話してる | 48. ユキ : う::[::ん] |



図 1. ステッカーの例

データ 1 の開始前、ユキは電車の車内に貼られている日本の国旗を模して作成された不買運動を促すステッカー (図 1¹⁰) に関する語りを披露した。ユキは車内でステッカーを目にすると視覚としての怖さを感じると話し、ナオもそれに同意を示した。さらにユキは、不買運動自体は勝手にしてくれれば良いと思うと発言した上で、ステッカーに関しては自分の国の国旗がそのような形で貼られ、そこに書かれている韓国語も理解することができ、それを目にした時の気持ちは嫌という表現では言い表せない、上手く説明できる言葉が見つからないものだと述べていた。またユキは、今は韓国で嫁として住みにくいと言い、それを聞いた調査者が具体的にどういった住みにくさがあるのかと質問した。上に示したデータ 1 は、質問に対するユキの回答から始まっている。

調査者の質問に対しユキは、住みにくさを感じる要因として「日本人っていうのを前にあんまり出せない状況」(1, 2)をあげる。そして、続く 5 行目からは具体的な例をスモール・ストーリーの形で挿入し、より詳細に説明する。スモール・ストーリー (5-13) の中でユキは、電車に乗っ

¹⁰ 韓国の検索サイト Naver (<https://www.naver.com>) で「No japan」で検索後、イメージのページに表示される画像例 (アクセス日 2021/3/1)。ボイコットジャパンの下には、韓国語で「行きません」「買いません」という内容の文章が記載されている。

ている際に子供に日本語で話しかけた時の状況を描き出し、それに気づいた他の乗客から向けられる「ああ日本語?」(10)という視線を気にする自身の姿を提示する(電車の中で日本語を話した際に周囲の視線が気になる私：レベル1)。ユキの語りを聞いていたナオは、ユキが話の核心に触れる前から何度も「わかります」(6, 8)と同意を示しており、5行目の時点で既にユキが今から語ろうとしている状況と相似したものがナオの頭の中にも浮かんでいることがわかる。そして、ユキの語りを受けて披露されたナオのスモール・ストーリー(16-28)では、ナオ自身が28行目でそのような視線を受けて居づらいという感情を明示している(電車・バスの中で日本語を話した時に周りの視線が気になり居づらい私：レベル1)。それを受けユキは、今度は相互行為の場において、自分たちに視線を向ける韓国の人たちが「日本語って思ってるのか外国語って思ってるのかわかんない」(29, 30)と前置きした上で、自分たち(ユキ・ナオ)を「(韓国の人々からの視線を)受ける側」(33)として位置付ける。そして、「今はそれがこうちょっと、何年か前と違って比べると」(36, 37)と述べ、日本語を話すことで視線を向けられるという状況は昔から存在したこと、しかし現在の状況と比較すると何らかの違いがあるように思えることを間接的に指摘する。その後40行目で、現状況下で視線が気になったり居づらさを感じたりする要因について、不買運動が起こる前と比較すると単に日本人がいるという感じではない意味合いがその視線に含まれているからではないかと感じてしまう為だと説明する。しかしながらユキはその直後に、そのような自身の印象について「被害妄想かもしれない」(41)と述べ、あくまでもそれは自分が一方的に抱いているイメージかもしれないことを明示している。つまり、ここでユキが調査者に対して示したい「住みづらさ」とは、日本語を話すことで視線を向けられるという以前から存在した事態よりも、視線の真意がわからないが故に日本人であることを前に出すのを躊躇しながら暮らさねばならないという現在の状況であることが理解できる。このように、相互行為の場においては、ユキとナオがそれぞれ自身の経験をスモール・ストーリーで提示しながら、調査者に「住みづらさ」を理解してもらおうと協力し合う様子が観察され、そのようなやりとりの中で「日本人であることを前面に出せない私たち(レベル2)」、「日本人であることで悪印象を持たれているのではと不安になる私たち(レベル2)」という彼女たちの立ち位置が協働構築されていた。

以上のように、データ1では語られる世界と相互行為の場の両方において、不買運動の最中に韓国で暮らす彼女たちが日本語を話すという状況、つまり自分が日本人であるという事実を韓国社会の中で表明することに対し不安感を感じていることが明示された。そして、その結果、日本に対する批判が強まる韓国社会の中で「ありのまま暮らせないマイノリティとしての私たち(レベル3)」という彼女たちの包括的な社会文化的自己の実践が明らかになった。

4.2 データ1：バトラーの「枠組み」と状況への交渉

次に、不買運動のさなかに韓国で公共交通機関を利用した彼女たちが、そこで遭遇した状況や他者に対しどのような情動を抱き(情動の提示)、どのような解釈の枠組みを構築し(解釈の枠組みの提示)、どのように状況と交渉していたのか(交渉姿勢の提示)について、データ1に現れた語りと相互行為を対象にして分析・考察する。

データ1の開始前、ユキは、不買運動は勝手に行えばいいと思うが、車内で目にする不買運動を促すステッカーには視覚的な怖さを感じるという語りを行う。そして、ナオもその発言に対し同意を示していた。これらのやりとりから、不買運動に対してではなく、普段利用する電車の中に貼られているステッカー(図1参照)を目にした際に、彼女たちが「怖さ」を感じているということがわかる(情動の提示)。この時点で、ユキは「日本人としてステッカーに怖さを感じる私」

4.3 データ 2: 「誤解を解きたい」

- データ 2 の開始前、ユキはインタビューの少し前に日本に帰国していた時の語りを披露した。そこでユキは、自分の幼馴染の母親から聞いてはいけないことかもしれないが質問しても良いかと言われ、現在の韓国の状況に関しての質問を受けたと話した。ユキは、自分たちの母親世代は

日本のニュースで報道される韓国の様子などから情報を得ているため、そのような状況の中でユキが傷ついていたらどうしようと不安に思い、なかなか自分に韓国のことについて質問できないようだと言った。またその体験を通して、近い人が現在の韓国をどのように認識しているのかを知ることになったと言ひ、その知人に対し実際の韓国の状況は不買運動が起こる前と変わらないこと、その影響で航空券が安くなるので助かったと感じていることを伝えたと話した。それを受け調査者は、知り合いに韓国の現状を説明した際にユキの中にどのような感情が湧いてきたのかと尋ねた。データ 2 は、その質問に対するユキの回答から始まっている。

調査者の質問に対し、ユキは「韓国の家族」(56)を持つ者として自らを位置付けたのち、「悪く言われた時は言い返す」(58)と発言する。それに対し調査者は、「どんなふうに悪く?言われたことありますか?」(61, 62)と問いかけ、それに対しユキは「ちゃんと説明しとかなあかんと思ったことがある」(64)と述べ、韓国人の家族を持つ者として韓国が悪く言われた時はちゃんと説明しなくてはいけないという意志を自らが持っていることを示す。そして、68 行目からは、調査者に対しよりわかりやすく自身が思い描く事態を伝えるためにスモール・ストーリーを語り、具体的にそれがどのような状況なのかということ为例示する。スモール・ストーリーの中で、ユキは今回の不買運動の状況を例に挙げ、日本のニュースだけを見て韓国は今大変なことになっていると認識している日本本土で暮らす日本人に対し、「私が住んでるところにデモしてる人まずいいひん」(71)、「みんな優しくしてくれる」(74)、「私とかその子供がなんか日本人やろお前みたいなことを絶対言われることはない」(75-77)と、実際に韓国で暮らす自分が知り得る様々な事実を列挙しながら説明する(韓国に暮らす者として韓国の現状を説明する私: レベル 1)。そして、そのような説明を「言います絶対に」(78)と強調し、説明しなければいけないという強い意志が自身の中にあることを改めて調査者に対し提示している。ユキの発言を受け調査者が、それは質問してきた相手に安心して欲しいからか(81, 82)と問いかけると、ユキは 83 行目で安心して欲しいという気持ちもあるが「ちゃんとそこわかって」(84)という「わかって欲しい気持ち」(86)、「誤解を解きたい」(88)気持ちからの行動なのだと述べる。また、それは「自分と自分の家族」(94)のために生じる思いであり行動なのだと発言する。84 行目のユキがわかって欲しいと思っている「そこ」(84)とは、その後にユキが「誤解を解きたい」(88)と発言している点から、日本で報道されている韓国の情報と実際の韓国の現状は異なっていること、であることがわかる。つまり、データ 2 において、冒頭で韓国人の家族を持つ者という自身の立ち位置を引き受けたユキは、スモール・ストーリーの中では日本社会に普及する韓国イメージと自身が知る韓国の状況にどのような乖離があるかを具体的に示し、相互行為の場では日本社会にはニュースからの影響で生じている韓国に対する誤解が存在していること、それに対し自分自身と自身の家族のために自らが知っている事実を説明することで対抗したいという強い意志を自分が持っていること(偏った情報だけで韓国を悪くいう人の誤解を解きたい私: レベル 2)を示しているのである。このようなユキの姿勢に対し、ナオと調査者も「うん」と相槌を返しつつ耳を傾けており、同じ境遇にいる在韓日本人女性として彼女の意志に対する理解を表明している。

以上のように、データ 2 では語られる世界と相互行為の場の両方において、不買運動の最中に日本に帰国したユキが、韓国に対する誤った認識に遭遇した際に自身と自分の家族のためにその誤解を解きたいという強い意志を持って行動している様子が明示された。そして、その結果、韓国に対する偏った印象が構築されている日本社会の中で「日本社会の風潮に対抗するマイノリティとしての私(レベル 3)」というユキの包括的な社会文化的自己の実践が明らかになった。

4.4 データ2：バトラーの「枠組み」と状況への交渉

次に、不買運動の最中に日本に帰国したユキが、韓国の状況を誤解している知人と会話をした際に、そこで遭遇した状況や他者に対しどのような情動を抱き（情動の提示）、どのような解釈の枠組みを構築し（解釈の枠組みの提示）、どのように状況と交渉していたのか（交渉姿勢の提示）について、データ2に現れた語りと相互行為を対象にして分析・考察する。

データ2の開始前、ユキは近しい人から韓国の状況を心配された語りを披露した。そこでユキは、自分たちの母親世代の人は日本のニュースが報道する内容を韓国の現在の状況だと信じているため、実際に韓国に住んでいる自分とは韓国に対する見方が異なっていると述べた。そして、その異なりに対してそうではないということを説明したと話した。調査者がその際にどのような気持ちになったのかを質問すると、ユキはデータ2の冒頭で「韓国人の家族を持つ私」という立ち位置を引き受け、悪く言われたら言い返す(58)と発言した。しかしその後ユキは、言い返すという行為についてちゃんと説明する(64)というように言い直し、喧嘩のような状態ではないということを明示した上で、具体的な状況例についてスモール・ストーリーを使用して調査者とナオに対し提示する。語りの中では韓国人の家族をもち実際に韓国に住んでいるユキが、日本本土で日本のニュースから情報を得ている人に「大変なんやろ?」(68)と心配されるという場面が描かれる。ユキはその発言に対し「えっちょっとまって」(69)とそれを制止させ、続いて自分が実際に目で見た韓国の状況を挙げながら、相手の持っている情報と現実が異なっていることを説明しようと試みる（交渉姿勢の提示）。また、その後の相互行為の場において、そのような行動は自分と自分の家族のために韓国を誤解している相手にちゃんと現状をわかって欲しい、誤解を解きたいという気持ちが要因となって生じていることが明らかにされる（情動の提示）。これらのユキの発言からは、実際に韓国に住み現状をその目で見ている者から見れば日本国内で行われている韓国に関する報道には偏りが存在している、そしてそこからしか情報を得ることのできない本土の日本人は韓国の現状を誤解している、とユキが認識していることがわかる（解釈の枠組みの提示）。またデータ2の中では、日本の韓国に対する報道スタイルの特徴という国家的なレベルの志向性に対し、個人的な対抗であったとしてもその偏りを指摘し、なんとか韓国の実際の姿をわかってもらいたい・誤解を解きたいと行動するユキの心情や姿勢も観察することができた（情動の提示・交渉姿勢の提示）。しかしながらその一方で、「韓国人の家族を持つ者」という立場を引き受け、日本に住む人々が持つ韓国に対する誤解を解きたい・自分が見ている韓国の姿を相手にも知って欲しいという意志が前景化することにより、データ1の中で示された自らが感じている恐怖心は後景化し、近しい人の前であってもそれに対する言及ができていない状況も見受けられた。

5. まとめ

先述した在韓日本人女性に関する先行研究では、彼女たちの背後に「日本人」や「韓国に住む日本人」など既に作られたコミュニティや主体が存在するという前提のもとで語りの内容のみが文脈から切り離されて分析され、彼女たちの発言からその背後にある日本人コミュニティや日本人の特徴を把握しようとするものが大半であった。それゆえに、在韓日本人女性は、韓国で長年暮らしていても日本名を改名しない・日本国籍を維持している・日本文化を維持したまま生活する、などの特徴を持った集団として位置付けられ、それが彼女たちのイメージを構築している傾向が見られた。そこで、本稿ではアイデンティティーを「他者との関わりの中で実践されるもの（＝意味づけの実践）」と定義し、インタビューの中に現れた在韓日本人女性の不買運動に関する

語りだけでなく、それを取り巻く相互行為にも焦点を当て分析・考察を行った。そして、彼女たちがなぜそのような発言をするに至ったのか、どのような関わり合いの中でアイデンティティが実践されているのかという、彼女たちが身を置く社会的な環境や関係性との関わりも同時に検証した。その結果、韓国社会においては「ありのまま暮らせない私（たち）＝日本人という自分の一部を躊躇なく表出できない私（たち）」、日本社会においては「主流社会の風潮に対抗する私」というマイノリティとしての立ち位置に彼女たちが立たされていることが明らかになった。同時に、韓国社会においては、自分が身をおく状況（韓国社会や韓国人）に対して具体的な行動を起こし対抗することはできない様子、しかしその一方で自分の心の中に反射的に湧き上がる恐怖やそれに即して構築される韓国（人）に対する解釈の枠組みに対してはそれを頭から受け入れず対抗する様子が観察された。これは、韓国で実際に生活してきた歴史や経験が瞬間的に生じる恐怖に呑み込まれるのを押しとどめている反面、そのような経験があってもなお日本に対する否定的なメッセージを目にすると反射的に恐怖を感じてしまうという不安定な状況のもとで、彼女たちの精神が揺れ動いていることの現れのように見受けられる。そしてまた、日本社会においては、自分が身を置く状況（日本社会や日本人）に対して、韓国を知る者として誤解を解こうと具体的な行動を起こし対抗している姿が見られたものの、それと同時に韓国を知る者として誤解を解くという役割を担っているがゆえに実際に自分が感じている恐怖を近い日本の知り合いにも打ち明けることができないという彼女たちの複雑な立ち位置が観察された。

本稿の結果は、日常生活の中に自分の力ではどうしようもできない国際問題に起因する影響が介入してくるという彼女たちの現状を、直接的に変化させるための助けにはならないかもしれない。しかしながら、本稿の結果が、危機的な状況と向き合う中で構築される彼女たちの危うい立ち位置を日韓両国の人々に理解してもらう一助となれば、周囲の彼女たちに対する認識に変化が生じ、それが結果的に彼女たちの置かれた状況を少しでも変化させる契機になるのではないかと考える。今後は、不買運動に関する語りだけでなく、竹島問題、夫婦間での日韓問題への関わり方、子供との歴史問題や政治問題に関するやりとりに関するものなど、インタビューの中に現れた日韓問題と関連のある多様な語りを分析しながら、日韓問題と共存する彼女たちの実態をさらに明らかにしていきたい。そして彼女たちの実態を明示することを通して、移民の人々が周囲の人々から本質主義的な民族性やアイデンティティに関する支配的言説を投影された際にどのような多文化的実践を行いつつそれらと交渉しているのかを提示し、彼・彼女たちの混淆性について受け入れる側の理解を促すとともに、彼・彼女たちの向き合う課題は自分たちとの関係性の中で生じているものであるということを再認識するための示唆の発見を目指したい。

参考文献

- Bamberg, Michael (1997). Positioning Between Structure and Performance. *Journal of Narrative and Life History*, 7(1/4), 335-342.
- Bamberg, Michael (2004). Form and Functions of 'Slut Bashing' in Male Identity Constructions in 15-Year-Olds. *Human Development*, 47(6), 331-353.
- Bamberg, Michael, & Georgakopoulou, Alexandra (2008). Small Stories as a New Perspective in Narrative and Identity Analysis. *Text & Talk*, 28(3), 377-396.
- バトラー・ジュディス (1999). ジェンダー・トラブル -フェミニズムとアイデンティティの攪乱- 竹村和子（訳） 青土社.
- バトラー・ジュディス (2008). 自分自身を説明すること -倫理的暴力の批判- 佐藤嘉幸・清水知子

- (訳) 月曜社
- バトラー・ジュディス (2012). 戦争の枠組み -生はいつ嘆きうるものであるのか- 清水晶子(訳) 筑摩書房
- イェルガゴポロ・アレクサンドラ (2013). ナラティブ分析 佐藤彰・秦かおり(編) ナラティブ研究の最前線 -人は語ることで何をなすのか- pp.1-42 ひつじ書房
- 藤高和輝 (2020). 他者とともにあるために：ジュディス・バトラーの責任論 (特集 責任という旅路)と世界 福音と世界, 75(9), 6-11.
- 秦かおり (2013). 「なんとなく合意」の舞台裏 在英日本人女性のインタビュー・ナラティブに見る規範意識の表出と交渉のストラテジー 佐藤彰・秦かおり(編) ナラティブ研究の最前線 -人は語ることで何をなすのか- pp.247-271 ひつじ書房
- Ishii, Hiroko, Min, Kiyoon, Seongok, Yuhua, & Lee, Yongsun (2015). Investigating the Cultural Identity of the Japanese Marriage Immigrant Women in Korea. *The Journal of Multicultural Society*, 8(2), 107-144. (韓国語文献)
- Kim, Seog-Ran (2007). A study on marriage motivation of Japanese-wives living in Korea. *Journal of Japanese Language Education Association*, 42, 241-258. (韓国語文献)
- 韓国法務部 (2020a). 国籍(地域)別在留外国人現況 <https://kosis.kr/statisticsList/statisticsListIndex.do?menuId=M_01_01&vwcd=MT_ZTITLE&parmTabId=M_01_01&outLink=Y&parentId=A.1;A_9.2;#content-group> (2021年3月20日)
- 韓国法務部 (2020b). 結婚移民現況 e-国指標 結婚移民現況 <http://www.index.go.kr/potal/main/EachDtlPageDetail.do?idx_cd=2819> (2021年3月20日)
- Kubo, Miho (2015). *Cultural adaptation and mental health of Japanese immigrant women married Korean*. Master's thesis, Sangmyung University, Seoul, Korea. (韓国語文献)
- 中西尋子 (2014). 在韓の統一教会元信者の日本人女性と韓国キリスト教会 宗教問題, 8, 62-71.
- 大貫挙学 (2007). 主体と社会のパフォーマティヴィティ: J. バトラーにおけるふたつの他者性をめぐって 年報社会学論集, 20, 61-71.
- Park, Esther (2017). Qualitative Research on Conflicts in Child-Rearing and Coping Strategy among Japanese Wives in Marriage Based on Love. *Journal of Japanese Language and Culture*, 38, 281-302. (韓国語文献)
- 竹下修子 (2000). 国際結婚の社会学 学文社
- Yim, Young-Eon & Lee, Hwa-Jung (2013). A Study on the Model of Acculturation and Multicultural Acceptance Attitude of Japanese Residents in Korea PDF icon. *The Journal of Peace Studies*, 14(4), 187-205. (韓国語文献)

トランスクリプト記号

(.)/(..)	0.2 / 0.5 秒以下の短いポーズ	@	笑い(個数は長さ)
↑↓	イントネーションの上昇と下降	ああ	声が前後に比べて大きい箇所
(数字)	(数字)秒の短いポーズ	[発話の重複の開始箇所
_____	強調的に発音される箇所	°ああ°	声が前後に比べて小さい箇所
?	疑問形の上昇イントネーション	¥-¥	笑いながらの発話(¥ ¥の間)
:	音の引き伸ばし	()	状況説明
(:の数)	(:の数)が長さを表す	><	前後に比べ発話速度が早い
=	続いて聞こえるように発話された箇所		

執筆者紹介（掲載順、2021 年 3 月 31 日現在）

秦 かおり（はた かおり）

大阪大学大学院言語文化研究科准教授

岡本 能里子（おかもと のりこ）

東京国際大学国際関係学部教授

児島 麦穂（こじま むぎほ）

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

中川 佳保（なかがわ かほ）

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

張 碩（ちょう せき）

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

竹村 博恵（たけむら ひろえ）

大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

言語文化共同研究プロジェクト 2020

相互行為研究⑦
— 談話と危機（クライシス） —

2021 年 5 月 31 日発行

編集発行者 大阪大学大学院言語文化研究科

